HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 全ドイツ連盟からナチ党へ ： ドイツ右翼運動・思想の連続と断絶 |
| Author(s) | 上岡, 裕里也 |
| Citation | 北大法政ジャーナル, 26, 29-63 |
| Issue Date | 2019-12-05 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/76265 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | HokudaiHouseiJournal_26_02_Ueoka.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 全ドイツ連盟からナチ党へ
# ドイツ右翼運動・思想の連続と断絶

上岡裕里也（うえおか ゆりや）

目　次

序論　問題と研究の状況 …… 31
第一節　問題意識 …… 31
第二節　先行研究概観 …… 31
（一）　ラウシュニンク・テーゼ …… 31
（二）　ラウシュニンク・テーゼの継承 …… 31
（三）　ラウシュニンク・テーゼの克服 …… 32
（四）　ドイツ政治思想史とナチズム …… 33
（五）　全ドイツ連盟の研究状況 …… 33
第三節　主題と目的 …… 34
第一章　全ドイツ連盟とナチ党：実践レベルでの比較 …… 35
第一節　全ドイツ連盟 …… 35
（一）　第二帝政における連盟：教養市民の急進組織 …… 35
（二）　ヴァイマル共和国における連盟：急進右派の統合を目指して … 35
（三）　「名望家政治」の限界 …… 36
第二節　ナチ党 …… 37
（一）　義勇軍と創成期ナチ党 …… 37
（二）　ミュンヘン一揆以降 …… 38
（三）　労働者志向性と国民政党 …… 39
第三節　運動の共通と相違 …… 39
第二章　全ドイツ連盟とナチ党：理論レベルでの比較 …… 40
第一節　全ドイツ連盟：クラースの政治思想 …… 40
（一）　普通選挙権・社会主義・都市化 …… 41
（二）　反ユダヤ主義 …… 41
（三）　ドイツ民族性の保護：大陸内部植民構想 …… 42
（四）　有能者の支配 …… 43

第二節　ナチ党：ヒトラーの政治思想 …… 43
（一）　人種理論：アーリアとユダヤ …… 43
（二）　国民社会主義：工業化と労働者の悲惨 …… 44
（三）　「生存圏」と農本ロマン主義：農村と都市 …… 45
（四）　人種闘争史観：世界観の総合 …… 46
第三章　旧右翼と新右翼：連続と断絶 …… 47
第一節　イデオロギーの連続面 …… 47
（一）　反ユダヤ主義 …… 47
（二）　ヨーロッパにおける拡大：生存圏の獲得 …… 48
（三）　反近代の思考 …… 49
第二節　イデオロギーの断絶面 …… 50
（一）　ブルジョワの罪と没落 …… 50
（二）　労働者大衆の意義 …… 51
（三）　歴史観の有無：新時代意識 …… 52
結論 …… 54
（一）　根本的断絶点 …… 54
（二）　革命と戦争 …… 54
（三）　個人の包摂 …… 56

## 序論　問題と研究の状況

### 第一節　問題意識

ナチズムの興隆は20世紀におけるもっとも衝撃的な出来事であった。ヒトラーの権力掌握をマイネッケは「ドイツにとっての最大の不幸の始まり[1]」とした。たしかに国家と党の二重化、指導者原理、秘密警察、反対派の暴力的排除、強制収容所などの現象は歴史上、ドイツ・ナチズムに特有ではない。ボルシェヴィキ・ロシアにもナチス・ドイツとよく似た特徴を有する全体主義体制が存在し、スペインにおいても権威主義体制が存在した。しかしながらナチズムの経験がことさらに興味と関心を惹くのは、それがドイツにおいて発生したという故だろう。哲学者と芸術家の国が、何故ヒトラーを生みだしえたか。以上のような疑問の根となっているのは、何故ドイツでナチズムが生まれたのかという問題意識だ。

本論の最も大枠となる問題意識はナチズムの出現である。ナチズムを出現せしめた要因にアプローチするには、経済史的、政治史的、思想史的方法など様々に考え得る。本論では政治思想史的アプローチでこの問題に取り組んでみたい。もちろんナチズムの出現と成功はただイデオロギー的側面からのみ説明し尽くせない。ではどうしてそのようなアプローチを取るのか。なぜならばナチズムは少なくともその指導者達にとっては「世界観」の運動として推進されてきたものだからである[2]。ヒトラーによれば古い世界観とそれに支えられる世界は、新しい思想と世界観に支えられた物質的武器によってしか倒すことはできないとされた[3]。すなわちナチズムの当事者たちにとって、思想は政治的・経済的合理性と並んで重要なものだったのである。よって、さしあたり本論において検討される問題はナチズムの思想的源流は何か、というものに限定される。

ナチズムの思想的源流を辿ろうとする場合、その範囲を確定する必要がある。時間的乖離が大きくなればなるほど、ある思想とナチズムの関係性を論証することが困難になる。そこで本論ではドイツ国民国家の確立以後、すなわち第二帝政以降を検討範囲としたい。

### 第二節　先行研究概観

#### （一）ラウシュニンク・テーゼ

本節ではイェッケル（1969）、中村（1990）、クロル（1999）らの研究史概観に基づいて、ナチズムの先行研究の流れを整理する。中村（1990）が指摘するように、ナチズムの理念史研究に関する著述はナチ党指導者の思想を直接扱うことなしにナチズムの思想的先駆者を探求するというものが多数だった。すなわちナチズムの内容を検討することなしに、その思想史的探求を試みるという矛盾した事態に陥っていたのである。そしてナチズム研究におけるナチズムの軽視という奇怪な事態を招くに至ったのは「ヒトラーに世界観やイデオロギーはない」という先入観が支配的であったためだ。イェッケルと中村はこうしたヒトラー像の形成に最も大きな影響を与えた人物としてダンツィヒ市のナチ党政治家であったラウシュニンクを名指しする。彼は1938年の著書の中でナチズムはその無原則性を本質とすると評した[4]。こうしたラウシュニンクの見解に依拠し、ヒトラーを機会主義者と断ずるラウシュニンク・テーゼが登場した。

#### （二）ラウシュニンク・テーゼの継承

1935年に初版が出版されたプレスナーの原題『遅れて来た国民』はすでに、ヒトラー、ナチ党の思想について探求することなく、ナチズム出現の精神史的背景をルターの宗教改革にまでさかのぼって究明し論じようとするものであった[5]。

1942年にデューイは『ドイツ哲学と政治：ナチズムの思想的淵源』において、ヒトラーについて「彼の宣伝のある角度、ある局面を補強すると思われる限り、彼の目に止ったありとあらゆる観念を拝借し、それを自分に都合の良いように改造[6]」したと評した。

ラウシュニンク・テーゼの影響下にある代表的研究としては1944年のノイマンによる『ビヒモス:

ナチズムの構造と実際』が挙げられる。ノイマンによればナチズムの理論家には論理の混乱が見られ、それは日和見主義によって特徴づけられる[7]。ここにはノイマンのラウシュニンク的ナチズム観がはっきりと読み取れる。

1951年にライヒマンはラウシュニンクを援用しつつ、ナチズムを以下の様に論じた。「国民社会主義は決してそれ自体で完結した体系ではない」、ヒトラーやナチ党幹部の政治構想は「一貫した思想体系を徹底的に排除」したものである[8]。イェッケルはこのライヒマンの著作を「ナチズムの反ユダヤ主義とは単なる手段としての性格にすぎないという、ラウシュニンク・テーゼをとりわけ代弁[9]」するものであるとしている。

1952年のブロックによる初の学問的ヒトラー伝において、ヒトラーの目的は「一番自然で純粋な形の「権力への意志」であって、（中略）その証拠にナチズムの唯一の主義はナチズムのための権力と統治であった[10]」とされた。また彼は「国粋社会主義はどんな思想をも生み出さなかった[11]」と評した。

ファウルは1954年の論文において権力欲をナチズムの出発点とし、理念や世界観はそれを駆動させるための手段にすぎなかったとした[12]。

1957年、ノイロールは『第三帝国の神話：ナチズムの精神史』のなかで『わが闘争』を「読むにたえない」「煽動家の演説に外ならない」と切り捨て、「最も悪しき意味のプロパガンダ」であると断じた[13]。すなわち彼はナチズム、ヒトラーの思想的究明を端から放棄しているのであり、その研究はナチズムを抜きにした「ナチズムの精神史」となっているのだった。

1959年のグレービングによる著作もナチズムの操作的性格を指摘している。彼の見解によればナチズムは「ドイツやヨーロッパの精神史の中から（中略）拾い上げられてきた概念や理念の寄せ集め[14]」なのであって、理念の混合物にすぎない。ヒトラーの根底にあるものは支配欲と権力欲なのであって、イデオロギーや世界観はそのためにいつでも操作、変更され得るものなのである。

1960年のブロシャートによる著作においても、やはりヒトラーの世界観の大衆操作的性格が指摘された。ヒトラーは理念を徹底して、戦術や宣伝の効用という観点から取り扱った。ヒトラーの成功はこのようなイデオロギーの操作的性格によるものなのである[15]。

一方でヒトラーに非原則性と原則性を同時に見出す矛盾に陥る研究もみられた。1963年のヒトラー伝でギゼフィウスは、ヒトラーは「彼だけの独創的な思想を何も創造してはいない[16]」と主張する一方で「『わが闘争』を正確に読み直してみれば、この男が世界にもたらした全てのこと、現実に起きたすべてのことはこの書の中にある[17]」と主張した。

### （三）ラウシュニンク・テーゼの克服

欧米の学会では1960年代からラウシュニンク・テーゼの見直しが開始されたが、きっかけとなったのがトレヴァー=ローパーによる1960年の研究である。彼はヒトラーに関する4つの資料の検討からヒトラーの「思想と行動における完全な一致と首尾一貫性[18]」を結論するにいたった。また彼はこれまでの研究を、ヒトラーの道徳的劣悪からその知性の低さを導こうとするものであり、ヒトラーに対する憎悪から彼の積極的側面を無視したと批判した[19]。

ノルテは1963年の著作においてさらに大きな前進を成し遂げた。彼はヨーロッパのファシズムに関する研究著作においてヒトラーの世界観について論究した。彼によればヒトラーの世界観は全体として総括してみれば「その一貫性と矛盾の無さで生きを飲ませるほど[20]」の一つの思想体系を表しているのであった。

1963年のツマルツリクによる論文[21]と1964年のホルボーンによる論文[22]は、どちらもヒトラーの世界観の根底にあるものを社会ダーウィン主義であると指摘した。

先に触れたゾントハイマーも1968年、ヒトラーの政治思想の中心には「一種の粗雑な社会ダーウィン主義があった[23]」と指摘した。

ラウシュニンク・テーゼを批判する立場からヒトラーの世界観の核心を究明するにいたったものが1969年、改訂版は81年に出版されたイェッケルによる著作である。イェッケルによればヒトラーの究極目的は二つ、ユダヤ人根絶と東方生存圏の確立にある。そしてこれら二大目標は歴史哲学の地平において結合し連関し、1941年に始まる独ソ戦はこのヒトラーの世界観の実践にほかならないのであった。

中村（1990）[24]は以上のようなナチズム研究の流れを俯瞰した上で、「国民社会主義」概念の検討が看過されてきたことをナチズム研究における致命的な欠陥として指摘し、「国民社会主義」概念の詳細な分析を行っている。結論として中村は、ナチ・イデオロギーを国民的社会主義・反ユダヤ主義・社会ダーウィン主義・農業ロマン主義・職能身分制コーポラティズムから成る複合イデオロギーとする。そしてこれらの根底には近代工業=都市社会への敵意が見出された。

さらに1999年のクロルによる研究は、ヒトラーに加えてヒムラーらナチ党幹部をもイデオロギー分析の対象に含めた。この研究が明らかにしたのは、イデオロギーの領域における多頭制的性格である。

### （四）ドイツ政治思想史とナチズム

以上概観したようにナチズムそれ自体の研究は近年になり高度かつ充実したものが提出されてきた。しかしナチズムの、ドイツ政治思想史との連続また断絶という問題はいまだ十分な解答が与えられていない。そうした問題意識に立つ研究としてまず挙げられるのは多田（1988）である。彼は「ドイツの近代化の過程において、国家社会主義の思想を醸成してゆく酵母があったのではないか[25]」という意識のもと研究を行っている[26]。しかし多田はヒトラーを思想研究の対象とはしておらず、ノイロール同様ナチズム抜きのナチズムの理念史となっている。だがナチズムの発生を解釈しようとする場合にはナチズムそのものの検討が必要であり、そこで抽出された構成要素を思想史上に跡付ける、という手続きを踏まねばならない。

このような手続きを踏んで行われた研究として挙げられるのが谷（2012）である。谷はナチズムの核心を反ユダヤ主義と東方ゲルマン大帝国構想であるとし、その東方支配構想を思想史上に跡付けることによって、ドイツ政治思想史の連続と断絶を明らかにしようと試みる。谷の結論によればヒトラーの東方支配構想は19世紀のドイツ・イデオロギー、第二帝政期急進右翼の政治思想、そして第一次大戦東部戦線における束の間の勝利という国民的経験から醸成された。特に全ドイツ連盟会長クラースとヒトラーは交流があり、ヒトラーの政治構想はクラースから多大なる影響を受けていることが明らかにされる。谷の研究はドイツ政治思想史におけるヒトラーとヒトラー以前の思想的連続性について充実した議論を提供するものであるが、著者があとがきにおいて認めているように、その非連続性については十分な論究がなされていない[27]。

### （五）全ドイツ連盟の研究状況

ヒトラーの政治構想に甚大な影響を及ぼしたと考えられる全ドイツ連盟及びクラースについて邦語文献における言及は稀である。一方欧米圏では既に1920年代から研究書が出版されているものの、第一次大戦後から1939年の解体にいたる歴史はあまり注目されてこなかった[28]。さらに既存の研究の多くはそのナショナリスト・イデオロギーに注目しており、そのイデオロギーこそがナチズムの起源であると指摘してきた[29]。全ドイツ連盟とナチズムのイデオロギー的連続性を強調する立場によればナチズムは第二帝政からヴァイマルを経て継承されてきたドイツ帝国主義、フェルキッシュ思想の遺児であって、第三帝国は偶然ではなく必然の帰結である。しかしJackishも指摘するように、この見解ではヴァイマル期における全ドイツ連盟とその他の右翼グループ、特にナチ党との不和を十分に説明できない[30]。Jackishの研究はこうした問題意識に基づいて戦間期全ドイツ連盟の歴史を描いたものである。全ドイツ連盟とナチ党

はヴァイマル体制の打破という目的を共有していた。しかし両者は複雑な政治的関係を展開し、ナチ党の成功と非ナチ右翼の分裂と崩壊という結果に至った。戦間期を通して全ドイツ連盟は常に他右翼グループの操作と結集、連帯に腐心しつづけたが失敗し、ナチ党の台頭を許したのであった。

Hofmeister（2012）も同様、従来の全ドイツ連盟に関する研究傾向として以下の様に指摘している[31]。大戦末期における連盟の政治的要求は大戦後国民社会主義運動とのイデオロギー的近似を示している。このように新旧右翼のイデオロギー的連続性に力点を置く立場からは、第一次大戦勃発から十一月革命にいたる期間において汎ドイツ主義がナショナリズムとフェルキッシュ思想を連結させ、ナチズム運動の興隆を手助けする結果となったことが強調される。しかしながらHofmeisterによればこうした見解は新たな形態の大衆政治運動そしてナチ党との競争において全ドイツ連盟が直面した限界を無視している。Hofmeisterの研究は連盟の後半期に着目する。戦間期において大衆政治という新たな挑戦に直面した連盟は、政治的調整や動員の文化的特性を変化させることで応答しようとした。だが連盟は動員能力の限界に直面し、「名望家政治」から脱することはできなかった。自らこそが急進右翼の政治的・知的指導者であり、大衆を教育すべき「教養市民」であるという連盟の使命感覚は、大衆政治と暴力とカリスマ的指導者のあいだにあってはもはや時代遅れであった。かくして連盟は右派勢力の結集に成功することなく「ミリューの連盟」にとどまったのである。

しかしここで新たな疑問として浮上するのは、両者のイデオロギー的近似にもかかわらず、何故戦前から強力な政治団体として存在した全ドイツ連盟が失墜する一方ナチ党は成功を収めたのか、というものである。

### 第三節　主題と目的

以上から本論が主題とするのは全ドイツ連盟に代表される旧右翼と、ナチ党に代表される新右翼の連続と断絶である。両者に連続する要素と断絶する要素を検討し、ナチズムやヴァイマル共和政の崩壊について考察する一助としたい。

既に見た通り、全ドイツ連盟とナチ党のイデオロギー的連続性についてはこれまでもたびたび指摘されてきた一方で、Jackishが明らかにしたように実践面において両者は目的を共有しつつも複雑な関係を持っていた。そして両者のイデオロギー的断絶や相違点はほとんど注目されてこなかった。そこで本論が目的とするのは全ドイツ連盟とナチ党のイデオロギー的相違を解明することである。そのために本論はまず第一章において主にJackishとHofmeisterの研究に依拠しつつ全ドイツ連盟とナチ党の実践レベルでの比較検討を行い、その共通点と相違点を確認する。次いで第二章においては両者を理論レベルで比較検討する。ここでは全ドイツ連盟の政治思想を代表するものとしてハインリヒ・クラースを取り上げ、ナチ党の政治思想を代表するものとしてアドルフ・ヒトラーを取り上げる。なお『わが闘争』また『第二の書』を引用するに際しては筆者が和訳したが、適宜平野訳を参照している。続く第三章では両者のイデオロギー的連続と断絶について議論し、解明していく。

最後に本研究の意義について述べる。ヴァイマル共和政は、敗戦を母とする民主主義体制であるという点で、戦後日本民主主義と共通した性格を有していた。しかるにヴァイマル共和政を終焉させた右翼運動およびナチズムの性質について考察することは、現代我が国の民主主義を擁護、維持する上で何らか寄与するものがあるだろう。この点において本論は社会的意義を有していると考える。また全ドイツ連盟に代表されるような汎民族運動と全体主義運動の関係については、アーレントによっても指摘されるところではあった[32]。しかしながら両者間の移行過程についてはほとんど研究がなされていないのが現状である。加えて我が国の歴史研究、近現代ドイツ史研究の著述においてすら全ドイツ連盟はほぼ言及されておらず、盲点となっていた箇所であると思われる。こうし

た状況において、近年欧米の史学界において注目されるようになった全ドイツ連盟の運動に関する研究成果を紹介するとともに、汎民族運動から全体主義運動への移行について少々の考察を加えることは、我が国の歴史学・政治学研究に対して僅かながら貢献するものであると考える。

## 第一章　全ドイツ連盟とナチ党:実践レベルでの比較

### 第一節　全ドイツ連盟

#### （一）第二帝政における連盟:教養市民の急進組織

全ドイツ連盟Alldeutscher Verbandは1891年4月、汎ドイツ連盟Allgemeiner Deutscher Verbandとして出発した。1901年の連盟会員の職業構成を見ると5割を小ブルジョワ知識人が占めており、地方支部代表レベルでは7割が小ブルジョワ層となっている。その一方で執行部においてはユンカーや軍人、独占資本家など伝統的支配層が知識人層と並ぶ数を占めており、大衆的組織の性格は組織の上方へ行くほど希薄になった[33]。このように連盟はその歴史を通して「教養と財産」を備えた都市部の中流階層からその構成員の多数を得ており[34]、大戦までの期間における職業構成を見ると大学教授含む教員の比率が最も多かった[35]。Chickeringのデータにおいても地方支部代表者の内農業従事者は約2%、労働者階級に該当するのはたった1%にすぎず、またその社会的性格について見ると博士号保持者が23.7%となっており、インテリ層が主体となった組織であった[36]。そのために連盟の社会的影響力は会員数以上に強力なものとなった。

全ドイツ連盟はハインリヒ・クラースの指導下で急進化し、民族主義の立場から政府との対決も厭わない団体へと変貌した。弁護士として政治活動に参入した彼は、政府との共存路線をとる会長ハッセ派との抗争に勝利することになった。1903年プラウエン連盟大会におけるクラースの演説は、全ドイツ連盟の「断固たる、広範な『国民的反対派』への第一歩[37]」を象徴していた。プラウエン連盟大会の翌年にクラースはハッセ会長の代理に選出され、1908年には会長の座に上り詰めた。連盟が主張したのはドイツ社会の包括的改革、すなわち教養あるエリート、象徴的権力としての君主、軍隊、議会における保守派・国民自由派による連合の実現であった。連盟はこの立場から政府の内政、外交政策に対し最も苛烈な批判を行った。

1914年8月1日ドイツ帝国の第一次世界大戦参戦は連盟にとって願ってもない事態だった。クラースにとって戦争は「わが民族の健康と、民族の身体的道徳的健全の保障[38]」に資するものであり、「城内平和」が連盟の望むような包括的改革を進める好機となることが期待された[39]。しかしドイツの敗色が濃厚となると、連盟はその反ユダヤ主義、反セム主義的傾向を強化していった。城内平和の不安定化と、左派からの和平を望む声の高まりが「国内の敵」に対する疑念を強めたためである。敗戦が明らかになると全ドイツ主義が煽りたてる反ユダヤ主義のヒステリーは最高潮に達した。18年9月に連盟によってユダヤ人委員会が設置された際、クラースはこう言い放った、「奴らを殺せ。最後の審判ではその罪が問われることなどない![40]」。連盟はさらに他の民族主義的圧力団体との接触を強化させ、祖国党など議会外の民族主義勢力の活用などを模索するも総じて失敗に終わった一方で、政府との対立を深刻化させていった[41]。

#### （二）ヴァイマル共和国における連盟：急進右派の統合を目指して

戦後連盟の怒りと不満は新たな共和国へと向かうことになった。全ドイツ連盟の指導のもと右翼勢力を結集することで、共和政を打倒しフェルキッシュな権威主義体制を確立しうるとクラースと連盟指導者たちは信じたのである[42]。戦後初の連盟集会は1919年2月16,17日にバンベルクで開催された。「国民的反対派」と自らを位置づける連盟はここに至って批判の矛先を政治家や政策を越えてヴァイマル国家そのものへと向けた。

城内平和の失敗からクラースはドイツ国民の統

合は独裁によってのみ可能であると確信し、19年1月には君主制こそがドイツ民族に相応しいと結論していた[43]。教養市民の政府・君主の権威・軍事独裁の連結を構想する連盟は軍事エリートやホーエンツォレルン家、義勇軍との接触を図ることになったが、いずれも成果を上げることはなかった。このように連盟は共和政転覆のため反革命勢力の結集を度々試みたが、その多くは失敗に終わった。Hofmeisterによればその一因は指導権をめぐる抗争にあったされる[44]。

連盟はヴァイマル共和政を拒絶し、右翼勢力の結集と民族主義エリートの権威主義体制確立を目的とした。そのため大戦後の連盟は常に背後から他の右翼組織に影響力を行使することを目指していた[45]。しかしこうした連盟の試みは大きな成功をおさめること無く、ヴァイマル期の右翼グループは常に分裂の様相を呈していた。そうした中20年1月のクラースとヒトラーの初対面以降、連盟はナチ党に散発的な資金援助を行い、共和政打倒への一手段としてナチ党にコントロールを及ぼすことを試みた。しかしながら連盟から独立した立場を保とうとするヒトラーの姿勢は明確であり、連盟とナチ党の関係は緊張したものとなった[46]。

20年のカップ一揆と23年のヒトラー一揆の失敗は、彼ら急進右翼の間の不和と不一致を表していた。一揆の失敗を見てクラースと連盟指導部は、共和政の直接的暴力的打倒はまず広範なフェルキッシュ運動の統合と軍事支援なしには不可能と考えた[47]。24年には連盟は安定期に入った政党政治システムの枠内で影響力を行使し始める。そこで連盟は共和国最大の保守政党であったドイツ国家人民党に接近し、24年から30年にかけて国家人民党の急進右翼化に尽力した。Jakischによれば国家人民党の急進化は、ナチ党と唯一拮抗しえた保守政党の破壊に他ならず、ナチ党の政権掌握を可能にした一因であった。全ドイツ連盟は急進右翼運動のため尽力していると自認していたが、その実は彼らのエリート主義的かつ狭窄な目標を受け入れない保守派を排除しているだけであった[48]。

ちょうどこの時期再び勢力を増してきたナチ党はもはや連盟にとって無視できない存在であった。29年の反ヤング案キャンペーンを機に連盟はナチ党に再接近し、ヒトラーとナチ党を既成右翼の統制のもと、ポピュリスト扇動家として利用しようと試みた。連盟指導部はヒトラーらナチ党がフーゲンベルクの指導下に入ることを期待していたが、ナチ党の躍進と国家人民党の衰退をみせた30年9月の選挙は、新旧右翼の形勢逆転を明確に示していた。31年10月ハルツブルク戦線から33年ナチ党の勝利までの期間、全ドイツ連盟とナチ党の橋渡しできない亀裂が明らかになっていった[49]。32年ナチ党が共産党と協力してベルリンで交通ストを実施したことは、連盟のナチ評価をどん底に叩き落とした。ここに至ってようやく連盟はナチ党が共産党と同様に国家に対する脅威であると見なしたのだった。33年1月30日のヒトラー内閣組閣後、連盟の状況報告書は「国民戦線」の勝利とフーゲンベルクの民族主義連合形成への尽力を称える一方でヒトラーを小さく扱っている[50]。全ドイツ連盟は39年3月15日、「民族および国家の危難を除去するための法律」に基づきゲシュタポによって強制解散させられた。ヴァイマル期を通して右翼運動統合を目指した連盟のエリート主義的アプローチはむしろ運動の分裂に大きな役割を果たしたのだった[51]。

### （三）「名望家政治」の限界

全ドイツ連盟は帝政時代から引き継いだイデオロギーに結び付けられ、23年まではヴァイマル共和国の政治文化における重大な象徴的権力であり続けた[52]。しかし連盟がヴィルヘルム時代の「名望家政治」の限界を超えていくには、連盟の資源と思考はあまりにも制限されたものにすぎなかった。例えば連盟は1919年反セム主義を大衆扇動へ利用する戦略の一環として、連盟の付属組織としてドイツ民族至上主義攻守同盟を創設し、16万から18万人規模の大規模な右翼運動へと成長させることに成功した[53]。1919年9月にミュンヘンに支部を組織した同盟は大資本に対する攻撃や利子奴隷制の打破を叫んで中産階級の間に広く浸透する

ことに成功した。1920年1月7日にミュンヘンで開催された同盟集会にはヒトラーも弁士として登壇しており、反ユダヤ主義の大衆扇動力を身をもって体験したという[54]。20年におけるナチ党の発展は、同盟の反ユダヤ主義的宣伝をナチ党側が意識的に利用しながら、同盟と競争しつつ達成したものであった。しかしこうした連盟の戦略は、連盟の会員身分を大衆へと開くことなく大衆の支持を取り付けようとするものであり、連盟が会員基盤を大衆にまで拡大することに乗り気ではないことを示していた。そのために連盟と攻守同盟の関係は混乱したものとなった。連盟指導部と同盟指導部は同盟の指導権をめぐって抗争し、22年には同盟は解体することになった。すでに20年初めから同盟の指導的メンバーは続々とナチ党に入党し、同盟とナチ党は人員的に大いに重なっていた。このような流れの中で、同盟解体後には同盟に動員されていた急進ナショナリストらは連盟に加入するのではなく、その多くがナチ党へ流れてしまった[55]。その中にはアルフレート・ローゼンベルクやラインハルト・ハイドリヒなど、後にナチ党において頭角を現すことになる著名な人物らが含まれていた[56]。

全ドイツ連盟のブルジョワ的「名望家政治」が急進ナショナリズムの要求にもはや適合するものではなかったことを示す一例として次に挙げられるのが、1919年から23年まで行われた全ドイツ・ユーゲントAlldeutsche Jugendの失敗である。全ドイツ・ユーゲントはベルリンの連盟司令部によって組織され、若者の連盟への取り込みが目指されたものの、最終的にはほんの数百人ばかりが加入するに終わった[57]。この一件は全ドイツ連盟には新世代に自らの使命を託す意志が希薄であって、若者の動員にコミットすることができなかったことを明確に示すものであった。連盟は戦争を戦った「前線世代」やそれ以降の若い世代の主張に対して無関心であった。さらに連盟は広範な女性支持者の獲得にも失敗した。

## 第二節　ナチ党

前節では全ドイツ連盟の歴史について概観したが、今節ではナチ党の歴史を概観する。

### （一）義勇軍と創成期ナチ党

敗戦と政治革命によってドイツは混乱と分裂の嵐の中へと叩きこまれた。左翼の武力蜂起などが相次ぐ中で政府が頼りとしたのが学生や退役兵らが中心となって形成された義勇軍Freikorpsであった。

G.L.ウェイトによれば義勇軍戦士が属した世代には二つの重大な経験が共有されていた[58]。その第一は戦前の青年運動、第二は第一次世界大戦である。「青年運動はほかでもなく、不満を抱いたブルジョワ青年の自由主義的なブルジョワ社会とその一切合切に対する反抗」であって、これら主要な側面は義勇軍の性格と国民社会主義運動の性格をも表していた[59]。そしてこの青年運動の中で称揚されたのは指導者への服従と行動への欲望であって、義勇軍運動と国民社会主義運動の両者に共通する要素が見出された[60]。また第一次大戦中に編成された突撃大隊の精神、「前線の兵士の文化」は義勇軍やナチ党突撃隊へと引き継がれた[61]。

義勇軍に参加した志願兵は、大きく前線兵士と青年学生の二つのグループに分けられた。前線兵士は新たな自由主義共和国に居心地の悪さを感じ、共和国政府の中に軍を欺いて「背後からの一突きDolchstoß」を加えた裏切り者を見いだした。また講和によって祖国のための闘争に参加する権利を奪われたと感じていた青年学生にとって、義勇軍への参加はそうした戦闘に加わるための新たな機会を提供してくれるものだった。

ベッセルによればナチズムは政治運動として始動した時からすでに戦争と結びついており、こうした義勇軍も同様ナチズムに結び付いていた[62]。義勇軍は後に国民社会主義運動において頭角を現すことになる人物たちに一時的な居場所を提供する機能も担っていた。塹壕からの帰還兵つまり前線世代に加えて、戦争を銃後で体験したより若い世代、これら両世代は義勇軍を通し後にはナチズ

ム運動を担っていくことになった。

ベッセルは創成期ナチ運動の特徴を以下のように要約している。すなわち反マルクス主義、反ユダヤ主義、反ヴェルサイユ条約、国内外での暴力行使である[63]。そしてこれら目的のためには軍事力がぜひとも必要なものだった。したがってナチズムは国内外における闘争運動であり、人種差別的世界観に貫かれた運動であった。

共和政に対する闘争的敵意はナチ党に準軍事組織の様相をまとわせしめた。ナチ党は議会政治の外側で強固な急進右翼大衆運動を先導しなければならず、議会外であらゆる手段を以てヴァイマル共和政を打倒することが、この時期のヒトラーの眼目であった[64]。こうしたナチ運動の暴力性は突撃隊において象徴された。突撃隊には多くの義勇軍兵士と学生が加入しており、1922年12月に編成された四つの百人隊の内、一隊は学生のみで構成されていた[65]。創成期ナチ党、ナチ運動はこのように大戦の経験の中から生じた義勇軍運動に精神的にも人的資源の面でも深い結び付きをもっていた。

### （二）ミュンヘン一揆以降

1923年ルール占領に伴う国民生活の混乱はヴァイマル共和政の打倒を企図する左右両極に絶好の機会を与え、右からの動きはバイエルン、左からの動きはザクセン、テューリンゲンで生じた[66]。こうした状況の中で実行された暴力的な政府転覆の試み、ミュンヘン一揆はヒトラーの逮捕という結果に終わった。一揆失敗後貨幣価値は安定し、シュトレーゼマンの下でルール占領も収束した。ミュンヘン一揆は失敗に終わったものの、ヒトラーの名を全国的に知らしめる結果となった。ヒトラー釈放後一新されたナチ党は規律ある政党として、議会制民主主義を打倒するべく議会に進出することになった[67]。

再建後のナチ党はヴァイマルに対する反対運動を法律の範囲内で行うことになった。しかし23年以降には安定期に入った共和政に対する過激な政治活動が大衆の支持を集める見込みはもはやなかった。事実28年の議会選挙でナチ党は僅か2.6%の票を獲得したのみだった[68]。しかし同年ナチ党は本拠地バイエルンを越えて全国政党へと変身し、28年にはナチ党は急進的人種主義を掲げる唯一の右派政党になっていた。党員規模の拡大に加えて、ナチ党は若年層の取り込みにも熱心だった。若者は突撃隊に入隊し、さらに前線を経験していない大学生からも絶大な支持を集めた。

ヒトラーをドイツ政治の表舞台に登場させる契機となったのが29年の反ヤング案国民請願運動であった。連盟が提出した、ヤング案がもたらす経済的影響の試算をうけて、国家人民党のフーゲンベルクはヤング案に反対する広範な民族主義戦線の呼びかけに踏み切った[69]。この運動には全ドイツ連盟はじめ多くの右翼グループが参加し、ナチ党の再起を全国的にアピールするとともにヒトラーがフーゲンベルクと肩を並べる大物右翼としての地位を確立する好機となった。この時期になるとヒトラーとナチ党は他の右翼諸集団と歩調を合わせるのでなく、他の団体がナチ党の指導に従うか、あるいは対等の立場で運動を進めるかという姿勢を取った。

29年10月に始まる世界大恐慌は景気の急激な後退を招き、特に農村部を疲弊させた。ナチ党はこの機に乗じて農村へと進出することになる。北ドイツの農村地帯ではすでに28年からラントフォルク運動と呼ばれる暴力的反ユダヤ主義反体制運動が広がっていた。このような農民の急進化は、工業利益を優先する共和国政府に対する幻滅に加え、既存政党や農業利益団体に対する反発の表れでもあった。そこでナチ党は30年3月、農業綱領を打ち出し農民層重視の姿勢を明確にした。ナチ党農政局局長ヴァルター・ダレーは農民層を「民族の若返りの源泉」とし、「血の流れ」と土地の有機的再結合を主張する「血と土地」のイデオローグであった[70]。ラントフォルク運動の中ではすでにヴァイマル共和政打倒を主張する農民同盟が出現していたが、ナチ党はそうした農民の連合組織や互助組織との協力を通して32年夏までには農村住民と小都市小市民の大多数を獲得することに成

功した[71]。

30年9月の議会選挙でナチ党は得票率18.3%をとり、12名から107名へと大幅に勢力を増大させ議会第二党へと躍進した。一方でフーゲンベルク指導下の国家人民党は73名から41名へと減少し、右翼勢力の指導権はもはやナチ党とヒトラーへと移ったことが明白となった。驚くべきことに全ドイツ連盟は、今選挙におけるナチ党の躍進をフーゲンベルクと連盟が先導する広範なナショナリスト戦線の勝利として見なしていた[72]。ヒトラー、ナチ運動の価値は、フーゲンベルクの反体制運動との同盟にあると考えていたのである。しかし31年ハルツブルク戦線においてナチ党がもはや右翼諸団体連合の一部に組み込まれることを望まない姿勢が明らかになった。ナチ党はもはやクラースやフーゲンベルクのような旧右翼とも、他のナショナリスト集団とも連合する気は無く、単独での権力奪取を目指していたのだった。それは33年のナチ党・保守派の連合によるヒトラー内閣から全権委任法によるナチ党独裁の確立という流れとして現実化した。

### （三）労働者志向性と国民政党

ヒトラーは『わが闘争』において労働者身分の引き上げによる国民への統合構想、すなわち国民社会主義を打ち出している[73]。さらにヒトラーは、ナチ運動は自らの支持者を労働者階級から引き出さねばならないとして、労働者獲得の志向を一貫させていた。中村（1991）によれば実際にナチ党は労働者の支持を一部獲得するのに成功を収めていたという。しかし従来の研究においては労働者層とナチ党の積極的つながりを否認するナチ党観、いわゆる「中間層テーゼ」が支配的であった。

中間層テーゼは資本家階級と労働者階級の間に存在する中間層すなわち手工業者や商店主、官吏などにナチズムの社会的基盤を見出そうとする立場である。この立場においては、ナチ党の躍進は中間層の急進化にその原因があると見なされ、1932年における典型的なナチ党投票者は農場や地方で生活していた中産階級の自営業のプロテスタントであったとされる[74]。中間層テーゼは1970年代ごろから修正が加えられることになるが、ここで登場するのがナチ党の支持基盤を中間階層以外の多様な層に見出す国民政党テーゼである。このテーゼを打ち出した1985年のファルターによる選挙分析を中村、原田両氏の要約に基づいて概観してみよう[75]。ファルターは1928年から33年の国会選挙における労働者のナチ党への投票行動を分析した上で、中間層テーゼの放棄を主張した。すなわちナチ党の選挙結果には労働者が大いに役割を果たしており、中間層領域にナチ党選挙人を限定することは出来ないとしたのである。ファルターによれば32年には労働者4人につき1人が、33年には3人につき1人がナチ党に投票し、労働者出身の無職者や主婦、家族構成員まで含めた労働者世帯の30%から40%がナチ党に投票したという。結論としてファルターは同時期の他政党に比較すればナチ党は全ての社会階層から支持を調達する国民政党であったとする[76]。

また党員の年齢構成についてみると、1930年時点でナチ党員の70%は40歳未満、30歳未満が37%となっており、党役員について見ると40歳未満が65%、30歳未満が27%となっていた[77]。ナチ党は明らかに「若い党」であった。

ベッセルは、ナチ運動にはユダヤ人を除くほとんどのドイツ人が引きつけられていたとしている[78]。ナチ党は1932年の時点でドイツ国民の幅広い層から支持を調達することに成功していた。ナチ党は特に若者の人気を集めていたが、同時に労働者、カトリック、女性、都市住民、年配者からの支持も他の政党が集めたよりもはるかに多く集めることが出来た。ナチ党は全てのドイツ人が社会的階級や宗派を超えて団結するという「民族共同体」のイデオロギーを単に掲げるだけではなく、実際にそのような共同体を支持者に示すことにある程度成功していた。

## 第三節　運動の共通と相違

全ドイツ連盟とナチ党は共に急進右翼の立場か

らヴァイマル共和政に反対する立場にあり、共和政の打倒を目指した活動を展開していた。全ドイツ連盟とナチ党はどちらも民族主義の立場から共和政に反対する「国民的反対派」の立場を共有し、反ヤング案国民請願運動やハルツブルグ戦線などにおいて共同して行動していた。組織の形態においても、指導者とそれにつき従う構成員から形成される指導者組織としての性格を両者は共有していた。

しかし両者の運動形態には大きな相違点が見られた。第一にあげられるのは、全ドイツ連盟は一貫して他の政治集団の背後にまわって活動していた一方でナチ党は大衆の目前で公然と活動していたということである。大戦前からドイツ右翼の前衛として存在感を放っていた連盟は自らを、若い民族主義政治組織を先導しまた教育する立場にあると考えていた。そのためヴァイマル期における連盟の一貫した政治戦略は、大衆動員に自らが積極的に乗り出すことなく他の政治集団に対して影響力を行使し、その結集を目指すというものであり続けた。村瀬（1977）はこのような全ドイツ連盟のあり方を「秘密な極右指導者組織」と表現している[79]。自分たち教養市民こそが大衆に民族主義的啓蒙を施さねばならないというエリート主義的な使命感覚を、連盟は捨て去ることが出来なかったのである。一方のナチ党は公然と活動を展開する大衆的政治団体であった。全ドイツ連盟が秘密の極右指導者組織であるならば、ナチ党は本来そうした組織の指導を受け大衆と近しい距離において活動する組織であった。しかしヒトラーは党が組織外からコントロールされることをよしとせず、連盟とナチ党の関係は複雑なものとなった。

第二に指摘できるのは全ドイツ連盟が旧態依然としたエリート主義的名望家組織であった一方、ナチ党は若者をはじめとして広範な社会階層にアピールする力を持った大衆組織であったことである。全ドイツ連盟は設立以降その歴史を通して都市の中間階層からその構成員を得ていた。さらに連盟は大戦を戦った前線世代やそれより若い世代に自らの使命を継承しようとする意志が希薄であった。一方でナチ党は義勇軍の精神を継承し、前線世代や若い学生に対してアピールする魅力を持っていた。ナチ党突撃隊は義勇軍と人員的また精神的にも密接なつながりを持った。さらにナチ党は労働者層にもアピールする力を持ち、労働者の獲得にある程度成功していた。ヴァイマル共和国における他の政党・政治集団が広範な社会層あるいは国民全体を引き付けることができなかった一方で、ナチ党は国民政党としての様相を整えることに成功していたのである。

## 第二章　全ドイツ連盟とナチ党:理論レベルでの比較

全ドイツ連盟、ハインリヒ・クラースとナチズム、ヒトラーの思想的連続性はこれまで多くの歴史家が指摘しており、従って全ドイツ主義はナチズムの先駆思想であると見なされてきた[80]。しかしそれら研究はヒトラー、ナチズムの資料に基づく内在的検討を行っているものではなかった。そこで本論第二章及び第三章第一節ではクラース、ヒトラー両名の政治思想を内在的に検討した上でその連続性を検討してみたい。結論を先取りすればクラースとヒトラーは都市社会=近代への嫌悪という根本的な意識において連続していたのである。

### 第一節　全ドイツ連盟：クラースの政治思想

ハインリヒ・クラース（Heinrich Claß,1868-1953）は1908年から39年の連盟解体まで約30年にわたって連盟会長を務め、第二帝政末期からヴァイマル共和国期にかけて筋金入りの大物右翼としての地位を占めていた。連盟の支持者は官僚や知識人サークルにまで広く見られ、全ドイツ主義の典型とされる思想は外交官、行政官、政治家の公式発言の言い回しの中にまで指摘できるほどであったという[81]。連盟の政治的主張すなわち帝国主義的世界政策、自由主義と社会主義に対する敵意、民族至上主義的ナショナリズム、人種論的反ユダヤ主義、政治的独裁の要求はヒトラーの世界観形成に大きな影響を与えた[82]。連盟の「善と悪

の闘争という二元論的な「世界観」はナチの「世界観」のかなりの部分を思想的に先取りするもの」であった[83]。事実ナチ政権下においては連盟関係者の間で「ナチズムは全ドイツ連盟の子である」という言葉が交わされていた[84]。1920年にクラースと初めて対面したヒトラーは自らはクラースの「忠実な教え子」であると述べ[85]、クラースの著作『もし我皇帝なれば』が自らに与えたインパクトの大きさを語った。谷によれば既に複数のヒトラー研究者がナチ党25カ条綱領の多くに『もし我皇帝なれば』が利用されていることを指摘しており、またヒトラーの演説における主張も「まさに全ドイツ主義が延々と唱え続けてきたことそのものだった[86]」という。以上の様にヒトラーとクラース・全ドイツ連盟の政治イデオロギーはその連続性と同質性がつとに指摘されてきたのである。

### （一） 普通選挙権・社会主義・都市化

クラースが『もし我皇帝なれば』（当時は「皇帝本Kaiserbuch」と呼ばれた）を執筆した動機の一つとなった事件は1912年1月の帝国議会選挙における社会主義勢力、すなわち社会民主党（SPD）の議会第1党への躍進であった。クラースにとってSPDは「祖国無き輩」に他ならず、この事件は革命と帝国解体を予感させる不吉な前兆であった。「帝国の国制は社会民主主義によって重大な危険にさらされている[87]」。そもそもクラースには普通選挙制度に対する敵意がみられた。普通選挙は能力が低く粗暴なものと教養市民とを同列に扱う悪しき平等思想に基づいている[88]。このような無制限な普通選挙制度によって劣等者の支配が可能となり、事実社会主義者の躍進という結果と帝国の危機を招いているのである。

こうしたクラースの社会主義に対する敵意の背後には、社会主義を生みだした工業化と都市化、平等思想への敵意があった。工業化はドイツ帝国を列強の地位へと押し上げてきたが、一方で農村の空洞化と都市への人口集中という事態を招いた。そして空洞となった東部の農地にはスラヴ人が外国人労働力として移住、侵入しているとされる[89]。その一方で人口過密となった都市部は劣悪な環境となり、ドイツ人の精神的身体的荒廃が加速している。加えてドイツ人の海外移住とそれに代わるスラヴ系移住者の増加もこの問題に拍車をかけている。以上のような状況はドイツ人の人口減少を招き、さらには外国人労働者とドイツ人の混血を進め、「人種の劣化」が進む[90]。

またクラースによればドイツの偉人は皆「理想主義者Idealisten」であり、ドイツ国家建設においては再びこの「ドイツの理想主義Deutscher Idealismus」が旗印とされねばならないとする。そしてこの理想主義の本質とは「利己主義を避け」「全体について、民族について考える」ことであるという[91]。だがクラースの見解では都市化と工業化はかようなドイツ的なパトスをも蝕み、拝金主義・唯物主義へと堕落させている[92]。こうした拝金主義の蔓延は「民族の健康」の弱体化と結びつく[93]。かくして唯物論的思考に支配され道徳的に堕落した都市住民は社会主義の温床となる。特に都市において「財産も教養も乏しい人間の大衆が結集したこと[94]」が帝国議会における社会民主主義勢力の台頭を招いたとされた。

### （二） 反ユダヤ主義

クラースによれば社会主義の脅威を一層深刻なものとしているのはユダヤ人にほかならず、そのインターナショナリズムはドイツの国益に真っ向から反する物であるとされる。クラースの見解によればSPDの勝利はユダヤ人の暗躍なしにはあり得ないことなのであり[95]、社会主義のインターナショナリズムはユダヤ人のインターナショナリズムの裏返しにすぎない。クラースにおいては社会主義に対する反感は反ユダヤ主義に接続されるのであった。

クラースの反ユダヤ主義は宗教的反感に基づくものではなく人種論的な反ユダヤ主義であった[96]。ユダヤ人は生物学的人種であって、信仰を捨てて改宗した所でドイツ人へと同化することはできない[97]。さらにユダヤ人は金融や商業にのみ能力を持つ非創造的民族とされた[98]。こうしたユダヤ人

の拝金主義、物質主義はドイツ人にも影響を与えている[99]。こうした脅威からドイツ人の「健康」を守るためには、ユダヤ人の影響を排除する必要があるとされた[100]。近代の害悪、すなわち物質主義・拝金主義の蔓延や農業のような生産的産業の衰退、そして社会主義勢力の拡大といったすべての問題はユダヤ人にその原因があるとされた。このように近代化、工業化や都市化がもたらすあらゆる問題、諸悪の根源としてユダヤ人を断罪することで、ドイツ民族は純粋無垢な穢れの無い存在として救済されることになるのだった。

### （三）　ドイツ民族性の保護:大陸内部植民構想

クラースはドイツの人口増への対処と自給自足経済の確立を、その拡張主義を正当化する大義名分とした[101]。「我々が必要としているもの、それはすなわち土地である[102]」。クラースは先に見たような工業化がもたらす様々な弊害は土地の不足に起因するものであると考え、ドイツの帝国主義的膨張を主張した。その一方で彼は国内植民の必要性も認識しており、特に帝国東部の開発が念頭に置かれた。海外植民の目的はあくまで原料供給地や市場の確保、将来的にドイツが人口超過となった場合にドイツ人を入植させることができる土地の確保であるとされた。そして将来的に必要となる土地はまさに今日獲得せねばならないとクラースは説く[103]。しかし彼は海外への人口流出とそれによる国内への移民流入によるドイツ民族性の劣化を防ぐため、現段階では国内植民とヨーロッパ大陸における拡張の優先を考えていたのであった[104]。

しかしクラースはヨーロッパ大陸における拡大の困難を認識していた[105]。東方ないし西方への拡大は戦争によるしか道は無い。だが戦勝によってロシアやフランスから土地を得たとしても、ドイツに敵意を抱く現地住民の存在からそれら領土の運営は困難なものとなる。そこでクラースが構想していたのが南東ヨーロッパへの拡大であった[106]。そこで満たされるべき二つの条件はまず第一にドイツとハプスブルク帝国が永続的同盟関係となり、両国家の利害が永続的かつ完全に一致すること、第二にハプスブルク帝国内でドイツ人の文化的・政治的指導権が強化されスラヴ人、マジャール人の影響が排除されることである。かくして「我々は一つの国家となるだろう[107]」。

しかしながらクラースの見るところハプスブルク帝国はスラヴ人やユダヤ人との抗争によって内部から疲弊し、存亡の危機に陥っている。そこでクラースは二つの解決策を示している。第一には議会を停止し、君主独裁によってスラヴ人を排除しドイツ人の支配権を再構築することである[108]。第二には必要とあらばハプスブルク帝国に対して軍事的なものを含めた干渉と援助をおこなうことである。

こうしたスラヴ人、異民族の排除によるドイツ民族性強化構想はオーストリアだけでなくドイツ帝国内部に対しても向けられることになった。ドイツにおける破壊的な異民族移民の増加は工業、農業共に労働力をドイツ国内でのみ賄うことが困難になってきたことが背景にあるという[109]。こうした状態においては特に無規律なイタリア人とクロアチア人が道徳的汚染を広め、また外国人労働者への労働力依存を高めることになる。「人種と衛生の観点から危険は明らかである[110]」。この観点からクラースは「人種的類似性Rassenverwandtschaft」に基づいた外国人の差別的取り扱いを主張する。すなわちゲルマン系外国人は歓迎されるべきであるが、スラヴ系民族やイタリア人は好ましくないとされた[111]。また人種差別的施策に加えてドイツ人の帝国本土への移住、再配置によるドイツ民族性の強化が提案され、それによって「価値ある人口構成要素」たる農民層が強化されるとした[112]。

クラースには自由で独立した農民階級こそが国家の中核であるという農本ロマン主義が見られた。東部プロイセンの大土地所有についてクラースはユンカー層を批判する立場にあり、大土地所有を分割の上ドイツ人を入植させ、独立自営農家を育成することを主張した。「また我々はオストマルクにおいて、自由で自立した、経済的また民族的に強力な農民を必要とする[113]」。これは東部に

おけるポーランド人、スラブ人の伸長を阻止し、ドイツ民族性を強化するための要石となる構想であった。

### （四） 有能者の支配

クラースには自由主義的普通選挙に対する敵意が根強くあった。クラースによれば普通選挙は多数の無能力者と少数の有能力者の差異を無視するものであって、結果として社会主義勢力の躍進という国家の危機を招くにいたったのである。「全て人間に同じ政治的権利を保障しようとすることは無意味で不正である[114]」。自由主義的普通選挙制度においては納税を怠る無産者、兵役拒否者、無教養者、不穏分子までもが平等に扱われる。こうした状況はクラースに見るところ正義に反した異常事態なのであった。

普通選挙に代わってクラースが提唱するのは身分制に基づいた五身分選挙であり、これによって「教養と財産」のある有能者の支配が可能になるとされた[115]。この選挙制度は納税額によって有権者を区分し、加えて業績能力や責任、全体に対する貢献度を考慮するというものであった。さらには世襲貴族と並んで、業績に基づいた業績貴族が設置されるべきことが要求される。しかしながら現状の議会は社会主義者が第1党の地位を占めており、選挙制度の根本的改革は不可能である。そこでクラースはクーデタと独裁による改革の断行を主張し、さらにそこで好都合な条件は戦争状態にあることであるとする[116]。そしてこうしたクーデタ、独裁の頂点として想定されたのは皇帝であった。しかし君主独裁は永続的体制ではなく、改革断行のための一時的措置でしかない。絶対君主制への逆転は不可能であり、君主の能力に依存する体制は危険だからである。従って憲法が改正された後には、政治権力は速やかに財産と教養あるものから構成される議会へと譲渡されねばならないのである。加えて女性は政治活動の一切から隔絶されねばならないとされた[117]。

以上のようにクラースの政治思想はヴィルヘルム期の急進ナショナリズムを体現していたが、それはエリート主義的性格が強いものであり、「ポピュリスト的」とは言い難いものであった。ヴィンクラーの指摘によれば、クラースが呼び掛けていた対象は国民全体ではなく社会上層、特に「アカデミック教養層」であった[118]。さらに世襲貴族と並ぶ業績貴族の設置や、身分制選挙の要求は反動的性格が強いものだった。ヴィンクラーはクラースの目的追求を要約して「市民的急進保守主義」としている。

## 第二節　ナチ党：ヒトラーの政治思想

前節に続いて、今節ではヒトラーの政治思想について検討していく。

### （一）人種理論：アーリアとユダヤ

『わが闘争』においてヒトラーは反ユダヤ主義に全世界的な意義を与えたとイェッケルは評価している。これまではドイツにおけるユダヤ人問題のみがフォーカスされ、それゆえにドイツからのユダヤ人追放が問題となっていたが、ここに至ってユダヤ人は全世界の諸民族にとっての敵として措定された[119]。ヒトラーにおいてはインターナショナリズム、ユダヤ主義、マルクス主義がほとんど同じ意味で用いられたのであり、イェッケルによればこの傾向は『わが闘争』のいたるところに見られる[120]。

『わが闘争』第1巻第11章においてヒトラーはアーリア人種の対極をなすものとしてユダヤ人を置いている。文化、人間性における価値を創造することができる人種は唯一アーリア人種のみであり、アーリア人種のみが人間性の創始者である[121]。従ってアーリア人種には人類全体の先頭を進む「指導人種」の役割が与えられ、他の諸民族を征服しまた指導するという使命を負い、それによって人類は発展ないし上昇するとされた。さらにアーリア人種は共同体への奉仕精神や全体に対する犠牲能力を持っており、ヒトラーはこうした行為を可能とする特性を「理想主義idealismus」と呼んでいる。犠牲能力によってエゴイズムが克服され、正式な国家を形成するための前提が充たされ

る。つまり国家とは「ある人種の保全と増殖のための生きた有機体[122]」である。国家は種の保存衝動によって形成された、生存闘争を勝ち抜くための道具である[123]。国家は「存在をかけた永遠の生存闘争に奉仕する強力な武器にすぎない[124]」。アーリア人の共同体精神はナチズムの「民族共同体」という形で現代化された。アーリア人種を特徴づけるのは以上のような文化形成能力と国家形成能力であった。

それに最も対照的な立場をとる対抗人種がユダヤ人であって、彼らは文化破壊民族とされた。そしてユダヤ人は理想主義的な性質を一切持ち合わせておらず、強力な自己保存衝動のみを発達させている。そのため彼らの犠牲的精神は個人の生存にとって都合が良い期間だけ持続する、外見上のものにすぎない。したがって彼らは領域的に限られた国家を形成する能力を持たないのである。そのために彼らユダヤ人は常に「他民族の体内に住む寄生虫[125]」として生きることしか出来ないとされた。そして寄生されたところの母体民族は死滅する運命にあるという。かくしてユダヤ人は他の民族とその国家の破壊者として振る舞うのであり、民族と人種の「分解酵素das Ferment der Dekomposition」となる。従ってユダヤ人種を特徴づけるのは文化破壊と国家破壊であり、ユダヤ人の使命は人類の汚染と文化の破滅である。ヒトラーはこうした二項対立に「アーリア人種の組織的原理」と「ユダヤ人の破壊的原理」という表現を与えている[126]。

### （二）国民社会主義：工業化と労働者の悲惨

ヒトラーは工業化のもたらす弊害について、農民階級の弱体化と大都市プロレタリアート大衆の増大による均衡の喪失を挙げている[127]。ヒトラーの見るところ、ドイツ帝国が対外膨張ではなく国内の工業化の道を取ったことはドイツにとって不幸な選択なのであった[128]。

工業化の進展が第一に生み出した問題は農村から大都市への人口流入、それに伴う農民階級の没落と都市労働者階級における貧困の蔓延である[129]。「この新しい階級の労働と生活状況は悲惨どころの話ではなかった[130]」。またこうした状態はドイツ人の「内面的ユダヤ化」を進めているとされ、それは手工業という創造的な職が軽蔑されるようになってきたことから明らかであるとされる。

工業化の第二の問題として指摘されるのがこうした拝金主義的態度の広がり、「貨幣の支配」であった。都市部においては拝金主義、唯物主義、利己主義が蔓延し、ドイツ人の自己犠牲精神のような美しい心性が損なわれていくのである。ヒトラーにおいて工業化は常にユダヤ人とユダヤ的精神つまり物質主義や拝金主義と結び付けられ、ドイツ的な美徳を毀損するものとしてイメージされていた。いわば工業化やそれに伴う弊害の一切は、彼にとって「ユダヤ人」の現象形態なのだった。

工業化が生み出した第三の問題として指摘されるのが国民が階級によって分断されていく状況であり、国家・国民の崩壊という事態である。「一つの国民が二つの部分へと引き裂かれている[131]」。第一の部分とは肉体的労働をしているものを除外した部分であり、インテリ層を含むごく少数部分である。第二の部分とは労働者大衆であって、多かれ少なかれマルクス主義の影響を受けている。従って彼らは国民的利益の促進をすべて拒否しているが、彼らは人口の大多数派である以上、彼ら抜きに国家の復興や国民の成立はあり得ない。

以上のように雇用主、企業家階層と労働者階層の分裂は深刻化する一方であるが、ヒトラーはその責任をもっぱら企業家階層の態度の内に見出している[132]。ここでヒトラーは企業家が労働者に対し非人間的、搾取的経営を行うならば彼らもまた「民族共同体」を甚だしく破壊するものであると断じている。そして国民の分裂という「この非常に深刻な問題[133]」をブルジョワジーが気にかけず、無関心に放置している隙にユダヤ人がつけいる。ユダヤ人は労働者の生存闘争を利用し、自らが支配者になることを画策するという[134]。彼らは労働者の悲惨な境遇に同情しているように見せかけ、「幸福な人々」への憎しみを煽りたて、そこに「完全に規定された世界観的刻印を押す。彼ら

はマルクス主義理論を創設する[135]」。ヒトラーにとってユダヤ人の世界観とはすなわちマルクス主義であった。

ヒトラーによれば労働条件の改善や少年労働の廃止、また女性の育児休暇の要求といった労働者たちの正当な要求すらも企業家階層、ブルジョワジーが拒絶したために、社会民主党は労働者大衆の取り込みに成功してしまったのである[136]。すなわちヒトラーの見解によれば、工業化の進展に伴って出現した工業プロレタリアートを国民へと統合することに失敗し、彼らをインターナショナリズム、マルクス主義へと向かわしめた責任は企業家層・ブルジョワ階級にあるとされる。そして労働者大衆を社会的苦境から解放し、文化的惨めさから解放することによって、国民として感じ、国民的であろうと欲する貴重な構成要素として「民族共同体」の中へと再統合しようとする運動こそが、国民社会主義運動なのであった。

ヒトラーは国民社会主義運動を、社会的関心の低い右翼ブルジョワジーとマルクス主義によって国民的思想から除外された左翼労働者階級との共通プラットフォームとして位置付けていた[137]。労働者をマルクス主義運動から奪還し、労働者とブルジョワの分裂を橋渡しして新しい国民を創設するという課題は、国民社会主義だけが実現できるとされた。そしてこのような労働者階級の国民への再統合は、上位階級の引き下げではなく、下位階級の引き上げによって行われる。またこの過程を担うものは上位の階級ではなく、自己と同等の権利を有している階級すなわち労働者階級そのものにほかならない[138]。さらに付言すればこうして形成される「民族共同体」は人種的純粋さを持ち、ユダヤ人など異民族分子は排除されることになる。言うなれば国民社会主義とは近代と工業化に対する、マルクス主義とは異なる一つの解答なのであった。

### （三）「生存圏」と農本ロマン主義：農村と都市

前項で触れたように、ヒトラーは人口増に伴う工業化の進展によって引き起こされる問題として農民階級の衰退を指摘していた。何故それが彼にとって問題であったのか。結論から言えばヒトラーは農民階級を民族の基盤と見なす農本ロマン主義を抱いていたからである。『わが闘争』第1巻第4章において彼は人口増に直面するドイツが取りうる政策として四つを吟味した上で、新しい領土の獲得とくにヨーロッパ大陸内部における土地の獲得こそが民族に生存の自由を保障すると結論している。また『第二の書』においては「民族の生存にとって最も確実な基礎は、どの時代においても自己の土地である[139]」と結論されている。ここで獲得すべき領土、将来の大ドイツ帝国に組み込まれるべき新天地として考えられていたのは東方、ロシアであった[140]。

領土拡大政策の長所としてヒトラーが挙げているのは「全国民の基礎となる健康な農民階級の保持の可能性」であり、農民の存在は社会的病理に対する最良の防御であると論じている[141]。ここでは農民階級が「全国民の基礎」という極めて重大かつ高い地位を与えられている。さらに彼は1927年12月10日ハンブルクにおける演説の中でドイツの破滅の原因を「自然的思考」の欠如に求め、工業製品輸出を病的現象と呼び、代わって領土の拡大つまり「生存圏」の拡張を選択すべきことを強調した[142]。さらに「生存圏」の拡大は民族の自給自足を可能にするのみならず、農民層の保持を通したドイツ民族の「健全化」に繋がるとヒトラーは発言している。こうした農村、農民礼賛の一方で彼は「大都市は次第に無気力かつ退廃的に作用する」と断じており、都市に対する敵意をあらわにしている。また都市に対する敵意と嫌悪感は『わが闘争』においても其処彼処に認めることができる[143]。

ヒトラーの大都市に対する嫌悪感の内には、都市の文化に対する悲観や憤激が色濃く表れていると言えるだろう。例えば彼は大都市の文化は「風紀的伝染病[144]」を持っているとし、演劇・芸術・文学・映画・新聞は青年の精神に対して害悪しか及ぼさない疾病のごときものであると断じて民族の心身の健全さを保存するための闘争を説いてい

る。大都市への激しい嫌悪と憎悪は『第二の書』にも見られる[145]。

こうした状況の打開策としてヒトラーが構想していたのが「生存圏」の拡大であった。それはドイツの都市化・工業化に歯止めをかけその害悪と疲弊からドイツ民族を救済するための構想であった。これによって商工業のような都市に結び付けられた国民扶養の手段は二次的なものとなり、農業という確固たる扶養手段が中心へと返り咲くことになるはずである[146]。新たに獲得された領土を農業用地として開拓し、大都市からドイツ人を移住、入植させることができるならば、それだけ民族体の基礎であるところの農民階層が強化されることになる。つまりヒトラーの「生存圏」構想は彼の農本ロマン主義、都市への嫌悪と農村の理想化に基礎づけられたものだったのである。

### （四）人種闘争史観:世界観の総合

「政治とは生成しつつある歴史である。歴史それ自体は民族の生存闘争の過程の表象である[147]」。ヒトラーは『第二の書』においてこのように述べ、民族と人種を主体とする歴史哲学を展開している。ちょうどマルクス主義の歴史観が歴史を階級闘争の歴史であると定義する階級闘争史観であったように、ヒトラーの歴史観はいわば人種闘争史観であった。歴史とは社会的経済的集団ではなく、人種的生物学的集団による生存闘争であるとヒトラーは主張したのである。

生存とは死に対する永遠の闘争であって、全ての生命は自己を維持しようとする自己保存衝動によって成り立っている。さらに人間の場合、自己犠牲による全体の維持という機能が付け加えられ、従って生存への衝動は「飢餓と愛Hunger und Liebe」すなわち自己保存と増殖として定義される。こうした原理は個々人のみならず個人の集合体である民族、人種にも妥当する。こうして各人種は種の保存衝動から領域を持った国家を形成する。人種とはすなわち国家である以上、多民族国家というものはありえずまた民族体に混入した異民族は異分子として排除されねばならない。そして各民族は生存のための空間=「生存圏」を必要とする。だが自己保存の衝動が無限である一方で土地は有限であるため、必然的に民族は生存をかけて闘争する。そしてこの闘争の中にこそ歴史の発展のカギがあるという。それはすなわち「永遠の闘争や格闘というこの自然法則[148]」「自然の貴族主義的原理」であり、強いものの勝利と弱いものの根絶、適者生存の原理であった。かくして戦争は「民族の根本的な、絶対的に確実な、永遠の発展という自然の、いや自明のシステムの一部となる[149]」。戦争は異常事態ではなくむしろ歴史の進行上で正常な状態と見なされる。ヒトラーにとって闘争、戦争はその歴史観の中心を占めると同時に歴史的発展の動因そのものでもあった。これは自然界の現象、適者生存・闘争原理を国家や国民のような政治領域へ転用したということであって、ヒトラー歴史観の社会ダーウィニズム的性格をあらわしている。

ヒトラーの政治観を彼の言葉に従い要約すれば以下のようになる。政治の課題は民族の生存闘争の遂行であり、生存闘争は民族扶養に必要な広さの領土の確保である。従って政治とは生存闘争の技術であり、外交とは民族に必要な生存圏を質量ともに確保することであり、内政とは民族のため生存圏を確保するに必要な力の行使を、民族の人種の価値と民族の数という方式に基づいて獲得する技術である[150]。こうして「生存圏」構想は先の農本ロマン主義的根拠のみならず歴史哲学的根拠を与えられることになった。歴史の本質、歴史の発展法則とは民族の生存闘争である。従ってあらゆる世界史的対決は民族を扶養するための「生存圏」獲得の努力の激突である。闘争という歴史発展法則は自然法則に基礎づけられており、政治は歴史に奉仕するものである。このようにしてヒトラーは政治を徹底して形而下-自然に、「血と肉からなる実体を維持すること[151]」へと矮小化したのであった。

ヒトラーの反ユダヤ主義はこうした歴史哲学と結び付けられ、体系的な世界観を構成した。第一項でみたように、ヒトラーのユダヤ人評の一つに

は、ユダヤ人は文化破壊民族であり国家形成能力を持たないというものがあった。ユダヤ人も人種である以上、自己保存欲求を推進力として有している。だが国家建設という創造的能力の欠如から、彼らは彼ら独自のやり方で生存闘争を遂行せざるを得ない。それはすなわち他民族の内部で、他民族の生産力に依存して生活するというものであった。そしてユダヤ人の最終目的は人種混交と、その混交人種の支配である[152]。かくしてユダヤ人は他民族がそうするように、土地をめぐっての闘争は行わない。彼らはむしろそうした自然の原理、歴史の法則に敵対する生き方しかできないとされた。したがって彼らは民族の原理を否定する国際主義を掲げ、闘争を否定する平和主義を標榜する。ヒトラーにとってユダヤ人に対する闘争とは歴史の正常な進行を妨げる病原体を排除するための闘争に他ならず、歴史の意味を回復するための戦いなのであった。ユダヤ人はアーリア人のみならず全人類の敵でもあり、従ってアーリア・ユダヤの二大原理の闘争は全世界史を特徴づける普遍的原理にまで拡大適用された[153]。

東方生存圏の獲得、つまり1939年6月22日に始まるドイツのソヴィエト侵攻はこうした世界観の実践にほかならなかった。ユダヤ人はマルクス主義の黒幕であり、したがってソヴィエトの支配者である[154]。またドイツ民族は自らの生存を保証するため新たな「生存圏」を獲得しなければならない。かくしてソヴィエトとの戦争は、ユダヤ人を排除することによって歴史の意味を取り戻すための、全世界的な意義を付与された闘争であったと同時にドイツ民族を扶養するための「生存圏」を東方に獲得するための闘争でもあった。

ヒトラーの政治思想は歴史哲学の地平において総合されるものだった。工業化と都市化の進展によって民族の基盤であるところの農民層が弱体化し、都市労働者の生活は悪化の一歩を辿っている。さらに都市の文化は本来創造的能力を持つドイツ人の精神を堕落させ、「内面的ユダヤ化」を推し進めている。工業化によってドイツ民族は労働者層と企業家層の分裂の様相を呈し、そのためにマルクス主義勢力=ユダヤ人勢力の拡大を許している。全ての民族・人種は永遠の生存闘争という歴史発展法則に従って生きている以上、その戦いを有利に勝ち抜くためにもこうした分裂を克服し、強力な「民族共同体」を再建せねばならない。この問題はただ新領土を獲得し、それを新たな農民層のための土地とすることで解決される。そこで提唱されるのが東方における領土獲得、ユダヤ人勢力の牙城たるソヴィエトに対する戦争であった。それは生存闘争という自然の原理、歴史の発展法則によって基礎づけられたものであって、その過程において自然の摂理に反する存在であるところのユダヤ人は排除されることになる。かくしてユダヤ人が排除されることによってドイツ民族は東方に広大な「生存圏」を獲得することになり、従って現在ドイツが抱えている諸問題は一挙に解決され、また全世界の諸民族にとっても健全なる生存闘争を行うための土壌が整備されることにもなる。以上のようなヒトラーの世界観全体の要となっている概念は「自然」であって、それは人間の意志では抗いがたいような確固たる法則なのであった。ヒトラーにとっては民族の生存闘争という自然法則に従った「自然的思考」が失われたことがドイツの破局の根本要因であった。

## 第三章　旧右翼と新右翼:連続と断絶

本章では第一節で思想の連続面を検討したのち、第二節で断絶面を議論する。

### 第一節　イデオロギーの連続面

#### （一）反ユダヤ主義

クラースとヒトラーの政治思想にまず共通するのはその人種論的反ユダヤ主義である。クラースによれば「ユダヤ人の危険の源泉はそれが人種だということにある[155]」。またヒトラーによれば「ユダヤ人は常に一定の人種的特性を備えた民族だったのであり、決して宗教だったのではない[156]」。両者ともにユダヤ人を生物学的な人種と見なしていた。さらにはその非難内容も、ユダヤ人を「寄生

虫」、創造能力の無い破壊的民族とするなど共通していた。第二にクラースとヒトラーは、ユダヤ人をして社会主義など左翼勢力の黒幕であると断じた。第三には両者ともに、ユダヤ人は民族の寄生虫であり、混血や経済的・文化的・道徳的悪影響によって民族体を侵食していく病原体であるとした。ここで指摘できるのはクラースもヒトラーもユダヤ人に対しては人種・民族の「分解酵素das Ferment der Dekomposition」という表現を与えていることである。クラースがユダヤ人をドイツ民族を精神的また物質的にも内部から腐敗させ崩壊に導く病原体としてイメージしたのと同様に、ヒトラーもユダヤ人をそのような病原体としてイメージしていたのである。

以上のようにクラースもヒトラーも内容面においてほとんど区別しがたいような反ユダヤ主義を主張していたのであるが、両者の通奏低音として次のことが指摘できるだろう。すなわちドイツにおいて工業化や都市化によって生じているあらゆる問題の全責任を負わせる対象としてユダヤ人が設定されているのだ。ユダヤ人は完全悪として設定され、その対立項としてドイツ人、アーリア人種が設定される。またクラース、ヒトラーは共にユダヤ的利己主義に対してドイツ人の自己犠牲的精神を称揚する際に「理想主義Idealismus」という表現を用いている。こうしてドイツに蔓延するあらゆる弊害がユダヤ人に帰せられることによってドイツ人は純粋無垢なる存在として救い出された。

### （二）ヨーロッパにおける拡大

第二章でそれぞれ概観したように、クラースとヒトラーは共に領土獲得による対外膨張を主張している点で軌を一にしていた。ここでは両者の問題意識とその解決策について検討してみたい。

クラースによればドイツ帝国は工業化と都市化によって民族性の劣化という問題を抱えており、それらは全て土地不足に起因している[157]。したがって対外膨張こそがクラースの解答であった。土地獲得は当然他国との戦争を意味するのであるが、クラースにとって戦争とはドイツが世界強国を目指すために必要不可欠な手段であると同時に、それ自体が民族の道徳的健康、都市化の中で失われつつある自己犠牲の精神を回復させ、民族の統一と調和を再び産みだす神聖な儀式であった[158]。

『皇帝本』の段階では、クラースはフランスやロシアへの拡大は戦争を伴うとみて、あくまで非常事態における選択肢であるとしていた。しかし今や世界大戦の勃発により、西方へも東方へも手を伸ばす機会が現実のものとなった。クラースによれば大陸で拡大された領土は自営農民のために運用されるべきである[159]。そうして大都市の過密状態は緩和され、食糧自給も確立しうる。すなわち領土の拡大は民族の支柱たる農民階級の健全化と強化に寄与する。さらに戦争で獲得された賠償金は都市における社会問題の解決に利用することが可能である。

ヒトラーの問題意識、危機意識もクラースとほぼ等しいものであったと言えるであろう。彼によれば人口増加への対応策として領土拡大ではなく工業化を選んだことがそもそもの誤りであった。問題解決策としてヒトラーが考えたのが領土＝「生存圏」の拡大、特に東方での領土獲得であった。増加した人口を扶養するために新たに獲得された領土を農業用地として開拓し、そこに人口を農民として移住させる。これによって民族体の基礎である農民階級は再び強化され、経済の自給自足も確保されることになる[160]。

このように両者は共に人口増への解決として領土の拡大を挙げ、その結果農民層の強化がもたらされると論じていた。こうした議論において、ヒトラーはクラースから明確な影響を受けていた証拠が見出されるとStoakesは指摘している。

以上のようにクラースとヒトラーはその問題認識及び解決策についてほとんど同様の議論を展開したのであった。もちろん両者の議論には細かい相違点も見られる。第一にクラースは国内植民が完了した後に大陸南東部への進出を考えており、帝国東部開発から対外膨張政策への過渡期的性格を示していた。しかしヒトラーは領土拡大こそが

根本的な解決であると考えていた[161]。第二にクラースが領土拡大の方向としてまず考えていたのは南東方面であったのに対して、ヒトラーは東方への拡大を考えた。しかしクラースも東方や西方への拡大を考えていなかったわけではなく、第一段階としてオーストリアへの拡大が主張されたのであった。クラースはドイツとオーストリアの永久的同盟、あるいはオーストリアとの合邦を構想していた。ヒトラーがクラースのオーストリア合邦構想から直接影響を受けたのかは定かではない。しかしその後の歴史の展開を見れば、クラースの構想は後にナチス・ドイツによるオーストリア併合Anschlussという形で実現されたと言えるだろう。

### （三）反近代の思考

以上のようにクラースとヒトラーはその反ユダヤ主義の主張や、対外膨張主義の主張において連続していた。ここで両者の思想に根本的に通抵している要素を抽出してみたい。結論から言えばそれは工業と都市に対する反感であり、反近代の思考なのであった。

クラースが『皇帝本』を執筆した動機は社会主義勢力の伸張に対する危機感からだった。議会における社会主義者の躍進が可能となった第一の原因は平等思想である。平等思想は「教養と財産」を兼ね備えた有能者と、教養を欠いた下層民や外国人、反国家分子ですら対等に扱う悪しきものであった。第二には工業化、都市化の進展が挙げられる。工業化は都市の発展と農村の衰退をもたらした。農村が空白地帯となる一方、都市部においては唯物論や拝金主義、利己主義が蔓延しており、ドイツ的な「理想主義」が失われ、ドイツ人の道徳的健康が蝕まれている。工業化と都市化、平等思想による劣等者の支配、拝金主義の蔓延といったドイツが直面する問題は全て近代がもたらした弊害であった。

ヒトラーも工業=都市社会に対する憎悪と、それが生み出す帰結に対して悲観的な態度を示していた。ヒトラーも第二帝政下における工業化についてネガティヴな診断を下し、農村の荒廃を嘆いた[162]。また都市の生活は文化的精神的に堕落しきっており、そこでは「ユダヤ的な」利己主義や物質主義、拝金主義が蔓延する。そこでは自己犠牲のようなアーリアの「理想主義」は損なわれてしまうのだった。工業化の進展は都市労働者階級を悲惨な生活状態へと押しやる一方で企業家階層を肥大化させ、労働者のマルクス主義化を進める。こうしてドイツ国民の間に深刻な社会的分裂が生じる。さらに工業化は農民層の破滅、弱体化を招く。「生存圏」の構想はドイツの工業化と都市化に歯止めをかけ、自然に根ざした農民層の活力を取り戻すことでドイツ民族全体を再生させようとする試みであった。工業、都市、拝金主義、利己主義、物質主義、そしてユダヤ人。これらはヒトラーにとっては民族共同体をバラバラの原子的個人へと解体する「分解酵素」であった。「生存圏」の確立によって民族共同体が樹立された日には悪しき物質主義や個人主義、近代の弊害の一切は解消され、無私の共同精神によって連結する包摂的な社会が誕生するはずだった。

クラースもヒトラーも近代化・工業化とそれに伴う都市化や個人主義、物質主義の蔓延をドイツ民族体への害悪と見なした。これら近代的なものは全て国民に分裂をもたらすものだった。カーショーによれば大戦後にナチズムが魅力をもちえた思想状況を作り出したのは「一九世紀後半のドイツにおけるナショナリズムの展開[163]」に他ならない。国民内部の分裂の拡大という感覚は開戦以前から存在していたが、大戦後にヒトラーが活用したのは「社会の多元性は不自然ないし不健全」であり分裂を抑え込むことで「統合された国民共同体」の創設が可能であるという思考が蔓延した社会状況であった。カーショーを敷衍していうならば、クラースら全ドイツ主義者の「不健全なドイツ社会」の認識、都市と工業に対する敵意、そして分裂を克服した新社会の夢は、第一次世界大戦の前後からドイツ社会に流布する感覚を代弁していた。そしてヒトラーもこうした感覚を継承し、またそうした意識が蔓延した社会状況であったか

らこそ、ヒトラーとナチ党の思想は求心力を勝ち得ることが出来たのだった。以上のようにクラースとヒトラーの間には強いイデオロギー的連続性が見出せる。しかしやはり疑問として残るのは、なぜそれにもかかわらずクラースと全ドイツ連盟を出し抜いてヒトラーとナチ党がドイツ国民に熱狂の渦を巻き起こしたかということである。以下ではその疑問を解く鍵としてイデオロギーの断絶面を検討していく。

## 第二節 イデオロギーの断絶面

### （一）ブルジョワの罪と没落

ヒトラーの見るところドイツ民族は工業化によって二つの部分に分裂していた。すなわち企業家・ブルジョワ階層と労働者階層である[164]。工業化、都市化の進展によって農村から都市へと流入した労働者たちの生活状況は悲惨なものであった[165]。悲惨な境遇へ転落した労働者は国民から脱落し、マルクス主義運動へと吸収される。そしてこうした国民の階級分裂を招いたのは、他でもなくブルジョワ階層であるとヒトラーは評価した[166]。ブルジョワ層の限界は、労働者階級が抱える諸問題の取り扱いを放棄し、労働者のマルクス主義化に無関心を貫き、労働者階級を民族共同体へと包含するという責務を投げ出したという無責任にあった。中村によればヒトラーは、工業プロレタリアートを国民へと統合する術を知らなかったことはブルジョワの責任であると発言している[167]。市民階級と労働者階級が分裂するという結果は「我らの過ぎ去った政治的ブルジョワがこうした観点からその最も重い罪を背負っていなかったなら決して生じなかったであろう[168]」。ヒトラーのブルジョワ批判はまず以上のようなブルジョワの実践的態度に対して向けられている。

ヒトラーのブルジョワ批判は理念的原理的なレベルにおける議論も含んでいた。政権獲得までの期間、ヒトラー・ナチ党はブルジョワ層を取り込むための戦術的リップサービスを行ったが、ヒトラーは彼らに対して精神的ないし政治的共感を全く示さなかった[169]。「ブルジョア階級の支持があるかどうかはあまり問題ではない[170]」。ヒトラーにとってブルジョワ的な価値観や社会秩序は時代遅れで老化した、没落を決定づけられたものでしかなかった[171]。ヒトラーが見るところ政治的観点におけるブルジョワ層とは過去の遺物であって、現在においては役に立たないものだった[172]。さらにブルジョワ階級を特徴づけるものはその弱さと非英雄的な心性、中道精神であった[173]。さらにヒトラーによればブルジョワの特性はその無理念性に見出される[174]。そして理念の欠落はすなわち闘争力の欠如でもあった。ヒトラーは闘争における鍵は世界観にあると見なしていた[175]。ある世界観に対する闘争はまた別の世界観に基づいて展開されねばならないが、ヒトラーの見解によればブルジョワにはそれが全く欠落していたのだ。従ってブルジョワはマルクス主義に対抗できる闘争力を持ち得なかった[176]。「テロはただテロによってのみ破壊されうる[177]」。ブルジョワは世界観を持つことなく、客観的で脆弱な立場に留まり続ける。一方でフランス革命、ボルシェヴィキ革命、イタリア・ファシズムは、世界観の正誤は別として確固たる世界観に基づいて遂行された故に成功したとされた[178]。

ヒトラーによればドイツ11月革命において、ブルジョワ政治家はマルクス主義に対して全く無力であった[179]。マルクス主義という世界観に立脚し、武器をとって蜂起した革命勢力に対し「年老いて使い古された世代[180]」であるブルジョワ世代の政治組織はもはや抵抗する力を持っていなかった[181]。かくして終焉を迎えようとしているブルジョワ的価値観・世界に代わって現れたのが、若々しく英雄的闘争心で満たされたナチズム運動であった。ナチズムは確たる精神的基盤を持つ運動であり、ブルジョワにかわってマルクス主義運動の対抗運動となるとされた。ナチズム運動は労働者の国民への包含というブルジョワ階級が放棄した責務を引き受け、代わってその使命を成し遂げるのである。

（二）労働者大衆の意義

ヒトラーは『わが闘争』第三章において、シェーネラー率いるオーストリアの全ドイツ運動について批判を展開しているが、ここでもブルジョワに対する批判が行われている。ヒトラーによればシェーネラーをはじめとする全ドイツ主義者の考えたことは理論的には正しく、シェーネラーも世界観の重要性を認識してはいた[182]。しかしシェーネラーはそうした信念の担い手に適しているのはまず第一に大衆であることを認識していなかった[183]。さらに彼は新たな世界観を担って闘争を行う主体という労働者大衆の意義を理解していなかったために、社会問題に対しても不十分な見解しか持つことができなかったという。かわってブルジョワ層に運動の主眼を置いたことが彼の失敗であった。そのために全ドイツ運動はブルジョワ的に「上品な」、穏健なものとなってしまった[184]。全ドイツ主義者たちは大衆に語りかけるのでなく、小さな議事堂に引きこもって議論をし続けた[185]。闘争ではなく議論を行い、運動が大衆ではなくブルジョワ層に立脚したこと、これがヒトラーの見るところ全ドイツ主義失敗の原因であった。カーショーによればシェーネラーはエリート主義者として大衆政党の価値を認めず、その主張は主として学生や中産階級に向けられていた。その点でヒトラーが参考したのがカール・ルエーガーだった[186]。

ルエーガーのキリスト教社会党の台頭はヒトラーに強い印象を与え、やがてヒトラーはルエーガーを信奉するに至った。その主な理由はその政治手法にあった。ルエーガーは下層中産階級や職人層などにアピールすることで支持を広げ、反ユダヤ主義を用いた大衆扇動を行った。ルエーガーの大衆統制と目的達成のための大衆運動、大衆心理操作のプロパガンダといった手法は、ヒトラーに受け継がれた[187]。ヒトラーの労働者大衆志向性の背景の一つには、ルエーガーとキリスト教社会党の姿があったと考えられる。

このようにヒトラーの思想にはブルジョワ的なもの全般に対する敵意とそれに対置されるところの労働者大衆への積極的価値付けが見られた。ヒトラーによれば「偉大な運動は全て大衆運動」であって、大衆の熱狂的エネルギーのみが民族の運命を転換しうる[188]。したがって目標を持つ運動は大衆との関係を失わないよう細心の注意を払わねばならない。ある理念を実現するための具体的な武器は大衆が持つエネルギー以外あり得ないのである[189]。そして国民社会主義運動の最高目標は「大衆の国民化[190]」であって、それは労働者を主体とした、労働者の地位向上によって為される[191]。ヒトラーにとって労働者大衆は問題の対象であると同時に、問題解決に不可欠の手段でもあった。

ヒトラーにとってブルジョワ的なものは中道的穏健であり、闘争を忌避する脆弱な精神であり、それは議会や民主主義に象徴されていた。そしてこれらの対極に国民化された労働者大衆によって担われるナチ運動が設定された。ヒトラーはオーストリアにおける全ドイツ運動にブルジョワ的要素を見ていたが、これはドイツにおける全ドイツ主義にも当てはまるものだったと言える。全ドイツ連盟は常に都市部の市民層から支持者を獲得しており、中間層ミリューの連盟から脱却し得なかった。理論レベルにおいてもクラースは大衆の政治進出が社会主義勢力の伸長を招いたと診断していた。そこで構想されたのが有能者の支配と身分制選挙、業績貴族の設置、教養市民による民族主義政府、身分制を基調とした民族共同体であって、ヴィンクラーが言うようにそのイデオロギーは反動的性格を持っていた。クラースにも都市部労働者の荒廃と社会問題に対する認識が無かったわけではない。しかしクラースが強調していたのは都市部大衆の無教養ゆえの社会主義拡大という問題であって、そこには常に無教養な大衆への蔑視があった。クラースはヒトラーが描写したような、労働者の没落による国民の分裂という事態を招いた無責任な民族主義ブルジョワの一人でしかなかった。

ヒトラーが民族主義運動の担い手として大衆に積極的な価値付けを行っていた一方で、クラースの目に映る大衆は数の暴力をふるう衆愚でしかなかった。さらにクラースの政治構想において実権

は有能者が多数派を占める身分制議会にあるとされた。ここにクラース思想のブルジョワ的性格・穏健性が色濃く表れている。結局のところクラースの政治思想は、ヒトラーが嫌悪したブルジョワ的社会秩序から逸脱しえなかった。第一章でみたようにナチ党は実際に労働者層をある程度吸収することに成功しており、党員構成の面でも労働者層は無視できない大きさを持つなどナチ党には労働者志向性があった。クラースには見られないヒトラーの労働者大衆に対する積極的評価と社会問題への認識を伴う国民社会主義思想は、ナチ党の労働者志向性として現実化されていた。

次に若年層をめぐる状況についても全ドイツ連盟とナチ党は対照的だった。全ドイツ連盟が若者にアピールする魅力を持たなかった一方で、ナチ党は同時期のどの政党よりも若者や学生を引き付ける魅力を持っていた。全ドイツ・ユーゲントの失敗は全ドイツ連盟が前線世代やそれより若い世代の要求に対して無頓着であったことを示しているが、その一方でナチ党突撃隊へは若者が殺到しまたナチ党に対する大学生の支持は絶大なものであった。またナチ党は突撃隊という形で「ブルジョワ社会に対する一切の反抗」であった戦前の青年運動を継承した義勇軍運動を人員的にも精神的にも吸収することに成功した。かくしてナチ運動は「前線の兵士の文化」を義勇軍を通して継承した。このことはクラースの政治思想が結局のところブルジョワ的穏健性を脱するものではなかった一方、ヒトラーの政治思想が闘争の賞賛で貫かれていたことを反映していると言える。

以上のようにクラースとヒトラーはブルジョワと労働者大衆・若者に関して対極的だった。クラースは大衆を蔑視する、旧態依然としたブルジョワ右翼であった。一方でヒトラーは国民の二極分裂という事態を労働者大衆の闘争運動によって克服することを目指す反ブルジョワ的右翼だった。総体的に見れば全ドイツ連盟のエリート主義的戦略と、街頭での示威行進や暴力沙汰、大衆集会を積極的に展開して労働者大衆の獲得を目指そうとするナチ党の戦略の相違は、クラース政治思想のブルジョワ性とヒトラー政治思想の反ブルジョワ性という対照的性格が実践レベルにおいて表出されたものであったと言える。ヴィンクラーによれば1917年の祖国党へと至る右翼結集運動とナチ運動を区別したものはナショナリズムと社会主義の結合であった[192]。ナチ党はナショナリズムの主張においてブルジョワ的ドイツと結合し、また国民社会主義はナショナルな労働者、職員、学生、若い大卒者を引き付けた。彼らは国民社会主義の旗の下でマルクス主義にも国家主義的反動にもくみさず、第三の立場に留まることが出来たのだった。

### （三）歴史観の有無:新時代意識

ヒトラーは常にブルジョワ層の無理念性と世界観の欠落を指摘し、ブルジョワの没落とその時代の終焉を主張していた。ヒトラーの世界観が歴史観の地平において総合されるものであるならば、ブルジョワには歴史観が欠落していたということになる。事実ブルジョワ的性格を保ち続けたクラースの政治思想には、ヒトラーが持っていたような大局的な歴史観が欠落していた。クラースの内政改革構想は彼の政治思想の復古的、反動的性格を最もよく象徴するものであった。実践面においてもヴァイマル期全ドイツ連盟は、ホーエンツォレルン家との接触など、その反動的性格を発揮していた。クラース及び全ドイツ連盟の実践・理論レベルにおける反動的性格は、そのイデオロギーを上位のレベルから規定し、総合するような歴史意識の欠落と結びついていた。彼らは直線状の歴史の発展という観念の欠落ゆえに、過ぎ去った時代に対する郷愁の念とそこへ立ち戻ろうとする意識を保ち続けていたのである。

一方でヒトラーの政治思想にはそうした復古的、反動的性格は見られなかった。ヒトラーは君主制を「時代遅れ[193]」と見なしており、革命による帝政の廃止を全く悲しんでおらず、後にはむしろ感謝さえしていた[194]。ヒトラー世界観の中心にあったのは人種の闘争によって駆動し発展していく直線状の歴史観であった。「世界史の車輪は決して後戻りしないのだ[195]」。そのためにヒトラーは

自らの行動を、歴史の発展法則という一段高い抽象的審判の立場から正当化することが出来た[196]。このような世界史の発展過程の中でヒトラーは自身が「人類の発展における転換点[197]」に立っていると自認し、また自らはこの世界史的新時代への根本的な大改革を実現するという意志を持っており、それは度々「革命[198]」という表現でもって示唆されていた[199]。ヒトラーによれば自らの出現は「千年の新時代[200]」の幕開けであり「世界はこの千年の間にたった一度しか遂行されなかった決断を行っている[201]」とされた。このような時代の大転換と新時代に先行し、克服されねばならなかったのがヴァイマルという「古い体制[202]」だった。

ヴァイマルはブルジョワ的社会秩序の象徴であって、ヴァイマルとヴェルサイユ体制の打破は「ドイツの自由の再獲得[203]」であると同時にブルジョワ時代の最終的崩壊でもあった。ヒトラーのブルジョワ階級の没落という認識は、旧時代=ヴァイマル共和国=ブルジョワ時代の終焉と新時代=第三帝国の開始という歴史の発展段階に包摂された。克服された旧時代に代わって現れたのが民族共同体という全く新しい秩序であった[204]。ナチズム運動当事者の理解において、第三帝国という新秩序の根本的に革命的な要素は、この国家がドイツ史上で初めて民族を強固な統一体へと統合し、あらゆる身分や階級、宗派、地域的分裂を止揚するのに成功したことだった[205]。かような認識が現実からまったく遊離したものではなかったことは既に見てきた通りである。こうして獲得された民族共同体という武器によって、ドイツ民族は人種の生存闘争を有利に戦うことが出来る。ナチズムの民族共同体は民族至上主義的人種思想に基づく共同体であるという点において、ヒトラー世界観の中核であるところの人種闘争史観に組み込まれていた。

一方でヒトラーは繰り返し自らがドイツ史の伝統を踏襲していることを強調しており、自信を漠然と表現された「過去」へと度々結び付けていた。そこでは古いものの「再興」や帝国の「再覚醒」といった表現が与えられ、ナチズムがもたらす時代の大転換を歴史的伝統の枠内に設定していた[206]。クロルによればこうした一見矛盾した表明は第一に戦術的動機、ナチ運動をドイツの歴史の流れと結びつけることによって、歴史的な威厳と信頼性を獲得するという目的からなされていた。だが一方でヒトラーは自身とナチ運動とはドイツの歴史の真髄を一つに集約するのであり、人種闘争の形でこの歴史を決定的終結へと導いていくのだと確信していたという。その限りヒトラーにとって、ナチ革命の唯一無二性と歴史伝統との連結は矛盾するものではなく、互いに対比的な補完関係にあった。

むしろヒトラーが行っていたのは「非歴史的な歴史への遡及[207]」であって、ヒトラーにとって実際に歴史上に存在したドイツ人の帝国、すなわち神聖ローマ帝国とドイツ第二帝政は積極的意義を見いだせるものではなかった。第三帝国、ナチス・ドイツの政策はこれまでのドイツ史上どの帝国も為し得なかった事業を、国民統一とヨーロッパにおけるドイツの支配権確立を実現すると約束したのであり、それが世界史的大転換、ナチズム革命の内実であった。

以上のようにヒトラーの政治思想にはクラースには見られないような普遍的歴史観が存在し、歴史観の地平において反ユダヤ主義、国民社会主義思想、生存圏構想が統一されていた。この歴史観の中でヒトラーは自らとナチ運動が歴史の大転換点に立っていると自認し、世界史上いまだかつて無かったような民族革命=民族共同体の樹立という大事業を実現するとしていた。その意味でナチ運動は「革命的」であった。そこには新しいものを始めるという意識と並んで、理想化された存在しない過去への回帰という意識も含まれていた。ナチズムの民族革命が意味するのはヴァイマル=世界観なきブルジョワ時代の終焉であり、「民族の時代」の開始なのであった。かようなヒトラーの認識においてはクラースが構想したようなエリート主義的身分制秩序や君主制は旧時代的遺物でしかなく、全ドイツ連盟やクラース自身を含めた旧右翼はもはやブルジョワ的残滓にすぎなかった。

## 結論

### （一）根本的断絶点

全ドイツ連盟とナチ党は反ユダヤ主義や帝国主義的主張においてイデオロギー的な連続性を保っていた。しかし両組織の運動形態面には大きな相違点が見られた。連盟のエリート主義的戦略は大戦後政治の潮流に沿うものではなく、連盟は教養市民のみに基盤を持つミリュー連盟に留まり続けた。一方でナチ党は同時期の他のいかなる政党と比較してあらゆる階層の支持を獲得することに成功し、国民政党的性格を持っていた。

全ドイツ連盟とナチ党はその実践面において相違を明らかにしていたが、この相違はこれまで論じられることのなかったイデオロギー的な非連続性と関連していると考えられる。その非連続性は端的に言えばクラースの政治思想がブルジョワ的社会秩序から逸脱するものではなかった一方、ヒトラーの政治思想はそうした秩序を明確に拒絶し、新たな時代の始まりを自らが担っていると認識していたという点であった。ヒトラーが繰り返し主張したのはブルジョワの没落と、民族共同体の出現によって特徴づけられる新時代の到来であって、それはナチズムの世界観に基づく大改革によってはじまるのだという「革命意識」に基づいていた。クラースとヒトラーを根本的に分かつものはこの革命意識にあった。

### （二）革命と戦争

ブルジョワ的性格を有したクラース政治思想との比較で浮き彫りにされるのが、ヒトラー政治思想の反ブルジョワ意識である。ブルジョワは無理念性、穏健、中道精神によって特徴付けられ、没落を決定づけられた階級であるとされた。ブルジョワが生じさせたドイツ国民の分裂を止揚し、マルクス主義と闘争するのが、若々しい闘争心に満ちた世界観・運動であるところの国民社会主義、ナチズムであった。すなわち国民社会主義はマルクス主義の対抗原理・対抗世界観であることを自覚し、また対抗原理たらんとする運動なのだった[208]。かような政治社会理論の領域における二元論的思考は、人種理論の領域においては創造的人種アーリアと破壊的人種ユダヤの二元論として現象していた。

国民社会主義とマルクス主義とは、この二つが両極を為す二大原理であるという形で結びついていた。両者は二律背反であると同時に、そこには本質的な親和性が見出される。それはブルジョワと対照的にナチズムとボルシェヴィズムは世界観を持っているという主張[209]、ブルジョワ時代の終焉という認識そして断固たる世界観に基づいて国家社会秩序の根本的改革を貫徹するという「革命性」である。ナチズムとボルシェヴィズムの構造的親和性、目標や方法における親和性はヒトラー自身によって度々表明されていた[210]。クロルの指摘によればブルジョワの没落と終焉という理論は本来マルクス主義歴史理論に由来する左翼の見解であった[211]。その後これは「保守主義革命」の指導的思想家たちによって右翼の政治理念の中に取り込まれたのだった[212]。加えてヒトラーの世界観の中核は人種闘争史観であったが、この歴史理論も階級闘争史観における階級に人種を代入したものと捉えれば、ボルシェヴィズムとナチズムの世界観はその歴史理論において密接した関係にあると言えるだろう。ヒトラーが明確な歴史観を構成しえた背景の一つとして考えられるのが、「保守主義革命」思想を介した左翼の歴史理論の受容である。

歴史理論における親和性に加えて、さらにナチズムとボルシェヴィズムの親和性を示すものとしてクロルが指摘しているのが、ヒトラーの少数派理論とレーニンの前衛的革命政党の主張の一致である[213]。レーニンは革命的少数派によるプロレタリア独裁の確立を論じたが、闘争時代の初期以来ヒトラーのイデオロギーにも同様の少数派理論があらわれていた[214]。

両者の理論面における類似性は運動形態におけるナチ党とボルシェヴィキの類似性として現れている。両者は共に大衆の運動であり、暴力をもいとわない戦闘的政治活動であった。この左右両極

の政治集団が似通った全体主義体制を建設した背景として考えられるのが、すでに述べたようにナチズムがマルクス主義・ボルシェヴィズムの対抗世界観・運動たらんとして自覚して生成されたものであったということだ。ヒトラーの世界観がどのような段階を経て形成されていったのかということは本論では触れられなかった問題ではあるが、彼はロシア革命やミュンヘン革命のような第一次大戦に付随する革命を独特の仕方で受容したのだと考えられる。

ミュンヘンにおける革命とそれに対抗する反革命急進右翼の過激な暴力の経験はヒトラーにとって極めて重要なものだった[215]。1918年11月から19年5月にかけてレーテ共和国とその暴力的鎮圧はバイエルンの政治意識に絶大な影響を与えた。当時はロシア革命からわずかに一年半であり、ロシアでは恐るべき内戦と残虐行為の結果ボルシェヴィキが反革命勢力を打ち負かしたと報じられていた。その状況下でバイエルンの農民と中産階級はボルシェヴィズムへの恐怖と憎悪をかきたてていったが、その受益者となったのが急進右翼だった。右翼のプロパガンダは国を乗っ取り、無秩序と混乱、恐るべき暴力をもたらすボルシェヴィキとユダヤ人というイメージを盛んに宣伝したが、それはバイエルンに染みついた革命のトラウマ故に受け入れられやすいものだった。このような状況だったからこそ、ヒトラーとナチ党は出現しえた。こうした経験の中でヒトラーは、大衆動員と暴力を伴う革命的世界観と運動はそれに対抗する要素つまりまた別の革命的世界観、大衆動員と暴力的運動によってしか打ち破られないと確信したのではないだろうか。従ってヒトラーの、ナチズムの思想と運動は共産主義思想・運動の鏡像のようにして一面においては類似した性格を持つようになったのではなかろうか。ヒトラーがマルクス主義思想の武器庫から理論や観念を直接盗用したのかはさておき、本論で論じてきたようなヒトラーの反ブルジョワ性・革命性そしてナチ運動の暴力性は、革命の経験なくしては形成されなかったと考えられる。

革命に加えて第一次世界大戦の経験もまたナチズムと切り離せないものであった。ナチ党は突撃隊において義勇軍と精神的・人員的結び付きを持ち、党の急進的主張や軍隊調の行動様式は前線で戦えなかった学生・若者たちにとって魅力的だった。戦後革命の嵐が吹き荒れ激しい政治的分裂や社会的分裂に陥っていたヴァイマルの人々にとって、戦争の大義のため国民をまとめ上げた「1914年の精神」や塹壕における友情のイメージは魅力的なものであり続けた。こうした状況の中で軍隊式の行動様式をもち、また分裂を克服した民族共同体を主張するナチ党は特別な魅力を持っていた[216]。ヒトラー自身も前線で戦った兵士の一人だったからこそ、そのような連帯と高揚に結び付けられた戦争イメージを理解し、同じ経験を共有した前線世代に対し有力なアピールをすることができたのだ。階級を克服した民族共同体というイメージは大戦の経験と記憶から生まれたものであって、従って戦争を英雄的に美化されたものと記憶していた有権者たちの支持を獲得することが可能となった。第一次世界大戦、敗戦、革命のトラウマがドイツ社会を政治的に急進化させなければ、ナチズムが受容されることはなかっただろうし、大戦と革命の経験がなければ、「アドルフ・ヒトラー」は誕生しなかっただろう。

以上のようにナチズムは大戦とそれに続く革命の記憶と経験によって、実践面と理論面の双方において影響されていた。反ユダヤ主義も領土獲得の要求も、ヒトラーの専売特許ではなかった。それらは少なくとも第一次世界大戦の前にはクラースによって準備されていた。にもかかわらずヒトラー・ナチ党が他のいかなる右翼勢力をも出しぬいて求心力を勝ち得たことの背景の一つには、彼の思想はある側面で革命的であり、失意のどん底にあったドイツ国民に新しい秩序の夢を見せるものだったということがある。第一次世界大戦の後に19世紀的市民社会は崩壊し、マルクス主義が政治の表舞台に登場した。同様にブルジョワ的秩序の崩壊を認識した上で、マルクス主義とは異なるもう一つの世界観を示し、それに対抗する世界を

建設しようとする政治勢力、ナチズムが現れた。一方は民族を、もう一方は階級を中核とする世界観であったが、双方ともに滅びゆく階級の時代を認識し、全く新しい政治社会秩序を創設するという意識を有していた。その意味で国民社会主義ドイツ労働者党はロシア共産党と双璧を為す20世紀最大の革命政党だった。

### （三）個人の包摂

階級や宗派の対立が克服された「民族共同体」のイメージは、大戦勃発によってわき上がった国民的熱狂によってドイツ国民が一時的にせよ団結しえたという記憶と結び付けられていた。前線で一兵卒として戦ったというヒトラー自身の経験も、戦場における「兄弟愛」、すなわち死を共に目前とすることによる特殊な絆に対する直感的理解を可能にした。この「兄弟愛」の経験と記憶は義勇軍、そして突撃隊という形でナチズム運動に包含されていた。このようにナチズム運動とヒトラーの政治思想に流れているのは、個人の包摂という経験であったと考えられる。それはまず大戦勃発による熱狂という形で経験され、社会的分裂と無力感の蔓延するヴァイマル共和国においては輝かしい経験として記憶されていた。ウィーンの生活で直面した分裂や荒廃の経験は大戦下における団結と高揚の経験を際立たせ、都市・近代社会に対する嫌悪感を形作った。ウィーンの名もなき存在であったヒトラーは戦争と軍隊生活の中で共同体へと包摂される経験を得たのである。「ウィーン時代に引き続き、大戦期は、ヒトラーの人格が決定的に形成された第二の時期だった[217]」。こうした包摂の経験への郷愁はヒトラー政治思想とナチズム運動に流れ込んでいる。分裂をもたらす都市社会の害悪を克服する農本ロマン主義に裏打ちされた「生存圏」構想や大戦期における一体感の記憶と重なり合って表明された「民族共同体」のイメージは、孤立を克服し孤独な個人を全体へと引き入れようとする渇望の表明でもあった。そうした包摂の経験を、包摂の共同体を表明する思想と運動に、敗戦による混乱と社会の分裂、自信の喪失に捕らわれていたヴァイマルの人々が引き付けられたのは全く不思議なことではなかったように考えられる。

前項でも述べたようにヒトラー思想の諸要素はクラースら古いナショナリストの遺産であり、それ自体ヒトラーに固有なものではなかった。彼の主張に求心力を持たせたのはその革命性、新秩序のアピールであって、そこで描かれたのは個人を包摂し尽くし、「人種の価値」によって個人に意味を与える共同体だった。彼の声があの時期の全ドイツに響き渡ったのは、それがゲルマン民族の優越や反ユダヤ主義など「分かりやすい」主張であったというだけでなく、分割された根なし草として不安と孤独に苛まれていた人々に包摂の夢を再び見せるものであったからだと思われる。そしてこうした共同体への包摂、個人の全体への解消という形での孤独の治癒という経験は、何も過ぎ去った時代に属する遺物ではない。自身を基礎づけうる価値基準も、自身の存在に意味を与える超越的な根拠も見失われた時代にあっては、そうした包摂の主張はいかなる文脈であろうとも、いつでも孤独な群衆を魅了してやまないものであり続けるだろう。その現象形態が民族主義右翼的であれあるいは左翼的であれ、より大きなもの、より確実なものへの帰依による孤独からの救済を約束する思想や運動は、ナチズムのような「分かりやすい」形態を必ずしもとる必要はない。価値や信仰が崩壊し、あらゆる個人が空虚へと投げ出される無力な状況にあっては、包摂の夢を見せる思想には、いかなる人間であっても容易く感染しうるだろう。

本論文はナチズムの発生について思想史的領域に限定して検討し、帝政期右翼思想とナチズムの関係について考察してきた。ナチズムは帝政期右翼思想から多くを受け継ぐと同時に、労働者大衆を原動力とする新時代の建設という「革命」意識を、先駆者と彼ら自身とを分かつメルクマールとして有していた。本論文の目的はこの断絶を明らかにすることにあった。

## 文献目録

### 一次文献


Claß,Heinrich,*Zum deutschen Kriegsziel : ein Flugschrift*, München : J.F. Lehmann,1917.

Claß,Heinrich,*Wider den Strom : vom Werden und Wachsen der nationalen Opposition im alten Reich,* Leipzig : R.F. Koehler,1932.

Frymann,Daniel(=Claß,Heinrich), *Wenn ich der Kaiser wär' : politische Wahrheiten und Notwendigkeiten*, Leipzig : Dieterich,1912.

Hitler,Adolf, *Mein Kampf*, München : Zentralverlag der NSDAP,1939.

*Hitler. Reden, Schriften, Anordnungen. Februar 1925 bis Januar 1933*, hrsg vom Institut für Zeitgeschichte, 5Bde.,München ; New York, 1992-1998.

*Hitler : Reden und Proklamationen, 1932-1945 : Kommentiert von einem deutschen Zeitgenossen*. hrsg und kommentiert von Max Domarus,4Bde., München:R. Löwit, 1965.

*Hitlers zweites Buch : ein Dokument aus dem Jahr 1928*. hrsg. v. Gerhard L.Weinberg, Stuttgart : Deutsche Verlags-Anstalt,1961.

ヒトラー,アドルフ,吉田八岑訳『ヒトラーのテーブル・トーク』三交社,1994年.

ヒトラー,アドルフ,平野一郎・将積茂訳, 2001,『わが闘争』角川書店,2001年.

ヒトラー,アドルフ,平野一郎訳『続・わが闘争：生存圏と領土問題』角川書店,2004年.


### 二次文献


Broszart,Martin,*Der Nationalsozialismus : Weltanschauung, Programm und Wirklichkeit,* Stuttgart : Deutsche Verlags-Anstalt, 1960.

Chickering,Roger,*We Men Who Feel Most German : A Cultural Study of the Pan-German League ,1884-1914*, Boston:Allen & Unwin, 1984.

Faul,Erwin, "Hitlers Über-Machiavellismus", in *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, 2.Jg.,1954, S.352,1954.

Gisevius, Hans Bernd, *Adolf Hitler : eine Biographie, Versuch einer Deutung*, München : Droemer Knaur,1967.

Grebing,Helga, *Der Nationalsozialismus : Ursprung und Wesen*, München : Isar Verlag,1959.

Hofmeister,Björn, *Between Monarchy and Dictatorship. Radical Nationalism and Social Mobilization of the Pan-German League 1914–1939*, WashingtonD.C. : Georgetown University, 2012.

Hofmeister,Björn, "Realms of Leadership and Residues of Social Mobilization : The Pan-German League 1918-33", in *The German Right in the Weimar Republic : studies in the history of German conservatism, nationalism, and antisemitism*. edited by Larry Eugene Jones ,New York ; Oxford : Berghahn Books, 2014.

Holborn,Hajo, "Origins and Political Character of Nazi Ideology" in *Political Science Quarterly*, Vol 79,p.545,1964.

Jackisch,Barry A.,*The Pan-German League and Radical Nationalist Politics in Interwar Germany, 1918–39,* Burlington, Vt.: Ashgate Publishing Company, ,2012.

Jackisch,Barry "A.,Continuity and Change on the German Right : The Pan-German League and Nazism,1918-39", in *The German Right in the Weimar Republic : studies in the history of German conservatism, nationalism, and antisemitism*. edited by Larry Eugene Jones, New York ; Oxford : Berghahn Books, 2014.

Kolb,Eberhald.Schumann,Dirk., *Die Weimarer Republik*. 8 Auflage , München : R. Oldenbourg, 2013.

Nolte,Ernst, *Der Faschismus in seiner Epoche : die Action française, der italienische Faschismus, der Nationalsozialismus*, München : Piper,1963.

Reichmann,Eva,*Die Flucht in den Hass : die Ursachen der Deutschen Judenkatastrophe*,

Frankfurt am Main : Europäische Verlagsanstalt, 1956.

Stoakes,Geoffrey, *Hitler and the quest for world dominion*, Leamington Spa, UK ; New York : Berg, 1986.

Trevor-Roper,Hugh R,“Hitlers Kriegsziele”in *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, 8.Jg.,S.122, 1960.

Zitelmann,Rainer, *Hitler : Selbstverständnis eines Revolutionärs*. 3. Aufl, Stuttgart : Klett-Cotta.

Zmarzlik,Hans-Gunther,“Der Sozialdarwinismus in Deutschland als geschichtliches Problem”in *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*,11. Jg.,S.246,1963.

アーレント、ハンナ，大久保和郎・大島通義，・大島かおり訳『全体主義の起原』みすず書房，2017年.

イエッケル，エバーハルト，滝田毅訳『ヒトラーの世界観：支配の構想』南窓社，1991年.

石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』講談社，2015年.

ヴィンクラー，ハインリヒ，アウグスト，後藤俊明他訳『自由と統一への長い道』昭和堂，2008年.

ウェイト．G．L，ロバート，山下貞雄訳『ナチズムの前衛』新生出版，2004年.

カーショー，イアン，川喜田敦子・福永美和子訳『ヒトラー』白水社，2015-2016年.

クロル，フランク，ロタール，小野清美・原田一美訳『ナチズムの歴史思想』柏書房，2006年.

コルプ，E，柴田敬二訳『ワイマル共和国史：研究の現状』刀水書房，1987年.

ゾントハイマー．K，河島幸夫・脇圭平訳『ワイマール共和国の政治思想：ドイツ・ナショナリズムの反民主主義思想』ミネルヴァ書房，1976年.

多田真鋤『近代ドイツ政治思想研究』慶応通信，1988年.

多田真鋤「ナチズムの精神構造：ドイツ精神史への一視角」『横浜商大論集』vol.37，no,1，pp,68-89，横浜商科大学，2003年.

谷喬夫『ナチ・イデオロギーの系譜：ヒトラー東方帝国の起原』新評論，2012年.

デューイ，J.，足立幸男訳『ドイツ哲学と政治：ナチズムの思想的淵源』木鐸社，1977年.

中村幹雄『ナチ党の思想と運動』名古屋大学出版会，1990年.

ノイマン，フランツ，岡本友季他訳『ビヒモス：ナチズムの構造と実際 1933-1944』みすず書房，1963年.

ノイロール，J,F.，山崎章甫，村田宇兵衛訳『第三帝国の神話：ナチズムの精神史』未来社，1963年.

林健太郎『ワイマル共和国：ヒトラーを出現させたもの』中央公論社，1963年.

原田昌博『ナチズムと労働者：ワイマル共和国時代のナチス経営細胞組織』勁草書房，2004年.

バロック，アラン，大西尹明訳『アドルフ・ヒトラー』みすず書房，1958年.

福井秀子「全ドイツ連盟の急進路線への転換：H･クラースの抬頭と新旧勢力の対立」『歴史研究』，22，87-108，大阪教育大学歴史学研究室，1984年.

フィッシャー，フリッツ，村瀬興雄監訳『世界強国への道:ドイツの挑戦1914-1918年』岩波書店，1972-1983年.

ブラッハー，K,D.，山口定・高橋進訳『ドイツの独裁：ナチズムの生成・構造・帰結』岩波書店，1975年.

プレスナー，ヘルムート，松本道介訳『ドイツロマン主義とナチズム：遅れてきた国民』講談社，1995年.

ベッセル，リチャード，大山昌訳『ナチスの戦争1918-1949：民族と人種の戦い』中央公論新社，2015年.

マイネッケ，F.，矢田俊隆訳，『ドイツの悲劇』中央公論社，1974年.

村瀬興雄『ナチズム：ドイツ保守主義の一系譜』中央公論社，1968年.

村瀬興雄『アドルフ・ヒトラー：「独裁者」出現の歴史的背景』中央公論社，1977年.

モッセ，ジョージ，L.，植村和秀他訳『フェルキッシュ革命：ドイツ民族主義から反ユダヤ主義へ』柏書房，1998年.
ラウシュニング，ヘルマン，菊盛英夫・三島憲一訳『ニヒリズムの革命』筑摩書房，1972年.

---

[1] Friedrich Meinecke, *Die deutsche Katastrophe: Betrachtungen und Erinnerungen* (Zürich,1946)『ドイツの悲劇』矢田俊隆訳（中央公論社1974)、9頁。

[2] Frank-Lothar Kroll, *Utopie als Ideologie. Geschichtsdenken und politisches Handeln im Dritten Reich* (Paderborn,1999)『ナチズムの歴史思想』小野清美・原田一美訳（柏書房、2006)、16頁。

[3] Adolf Hitler,*Mein Kampf* (München,1939), S.173. 以下本書を*MK*と略記する。

[4] Hermann Rauschning ,*Die Revolution des Nihilismus* (Zurich and. New York,1938) 『ニヒリズムの革命』菊盛英夫・三島憲一訳（筑摩書房、1972)、33頁。

[5] Helmuth Plessner, *Die verspätete Nation : über die politische Verführbarkeit bürgerlichen Geistes* (Stuttgart 1959, zuerst Zürich 1935)『ドイツロマン主義とナチズム：遅れてきた国民』松本道介訳（講談社、1995)。

[6] John Dewey,*German philosophy and politics* (New York,1942)『ドイツ哲学と政治：ナチズムの思想的淵源』足立幸男訳（木鐸社、1977)、11-12頁。

[7] Franz Neumann, *Behemoth : the structure and practice of national socialism, 1933-1944* (2nd. ed.,London,1944)『ビヒモス：ナチズムの構造と実際』岡本友孝・小野英祐・加藤栄一訳（みすず書房、1963)、40頁。

[8] Eva Reichmann, *Die Flucht in den Hass : die Ursachen der deutschen Judenkatastrophe* (Frankfurt am Main 1956),S.220.

[9] Eberhard Jäckel, *Hitlers Weltanschauung : Entwurf einer Herrschaft* (Tübingen, 1969)『ヒトラーの世界観：支配の構想』滝田毅訳（南窓社、1991)、16頁。

[10] Alan Bullock, *Hitler : a study in tyranny* (London,1952)『アドルフ・ヒトラー』Ⅰ・大西尹明訳（みすず書房、1958)、11頁

[11] 同上Ⅱ、387頁

[12] Erwin Faul, Hitlers Über-Machiavellismus,in *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, 2.Jg.,1954,S. 352.

[13] Jean F. Neurohr, *Der Mythos vom Dritten Reich : zur Geistesgeschichte des Nationalsozialismus* (Stuttgart,1957)『第三帝国の神話：ナチズムの精神史』山崎章甫・村田宇兵衛訳（未来社、1963）30頁。

[14] Helga Grebing, *Der Nationalsozialismus : Ursprung und Wesen*, (München,1959),S.50.

[15] Martin Broszart, *Der Nationalsozialismus : Weltanschauung, Programm und Wirklichkeit* (Stuttgart,1960),S.42-43.

[16] Hans Bernd Gisevius, *Adolf Hitler : eine Biographie, Versuch einer Deutung*, (München, 1963),S.38.

[17] Ebd.,S.100.

[18] Hugh R.Trevor-Roper, Hitlers Kriegsziele, in *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, 8.Jg.,1960,S. 122.

[19] Ebd.,S.122.

[20] Ernst Nolte,*Der Faschismus in seiner Epoche : die Action française, der italienische Faschismus, der Nationalsozialismus* (München,1963),S.356.

[21] Hans-Gunther Zmarzrik ,Der Sozialdarwinismus in Deutschland als geschichtliches Problem, in *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*,11.Jg.,1963, S.246.

[22] Hajo Holborn, Origins and Political Character of Nazi Ideology, in *Political Science Quarterly*, Vol.79,1964,p.545.

[23] ゾントハイマー、前掲訳書、135頁。

[24] 中村幹雄『ナチ党の思想と運動』（名古屋大学

出版会、1990)。

[25] 多田真鋤『近代ドイツ政治思想研究』（慶應通信、1988)、537頁。

[26] なお多田は2003年の論文においても同様の議論を行っている。

[27] 谷喬夫『ナチ・イデオロギーの系譜：ヒトラー東方帝国の起原』（新評論、2012)、228頁

[28] Barry A. Jackisch, *The Pan-German League and Radical Nationalist Politics in Interwar Germany, 1918–39* (Burlington,2012),p.2.

[29] *Ibid*.,pp.4-5.

[30] *Ibid*.,p.6.

[31] Björn Hofmeister, M.A., *Between Monarchy and Dictatorship. Radical Nationalism and Social Mobilization of the Pan-German League 1914–1939* (WashingtonD.C. ,2012),pp.1ff.

[32] 「いずれにせよ、ナチはオーストリア版の汎ドイツ運動から、他のいかなるイデオロギーもしくは運動からよりも多くの決定的な影響を受けている」アーレント、前掲訳書2、185頁。

[33] 福井秀子「全ドイツ連盟の急進路線への転換：H･クラースの抬頭と新旧勢力の対立」『歴史研究』、22(1984)、91-92頁。

[34] Jackish,2012,p.3

[35] ダーウィン主義生物学者ヘッケルや歴史学者ランプレヒト、一時的にはウェーバーも会員として名を連ねていた。

[36] Roger Chickering, *We Men Who Feel Most German : A Cultural Study of the Pan-German League 1884-1914* (Boston,1984),p.103

[37] Heinrich Claß, *Wider den Strom : vom Werden und Wachsen der nationalen Opposition im alten Reich* (Leipzig,1932),S.93.

[38] Heinrich Claß, *Zum deutschen Kriegsziel : ein Flugschrift* (München,1917),S.12.

[39] Hofmeister,2012,p.68.

[40] Ian Kershaw, *Hitler, 1889-1936: hubris* (London,1998)『ヒトラー：1889-1936傲慢』川喜田敦子訳(白水社、2015)、127-128頁.

[41] 同上、111頁以下

[42] Jackish,2012,p.14.

[43] Hofmeister,2012,pp.186ff.

[44] Björn Hofmeister, M.A., Realms of Leadership and Residues of Social Mobilization : The Pan-German League 1918-33, in *The German Right in the Weimar Republic : studies in the history of German conservatism, nationalism, and antisemitism*. ed. by Larry Eugene Jones (New York ; Oxford, 2014),p.138.

[45] Jackish,2012,p.87.

[46] Barry A.Jackish, Continuity and Change on the German Right : The Pan-German League and Nazism,1918-39, in *The German Right in the Weimar Republic : studies in the history of German conservatism, nationalism, and anti-Semitism*. ed. by Larry Eugene Jones (New York ; Oxford, 2014),p.173.

[47] Ibid,p.173-174.

[48] Jackish,2012,p.187.

[49] Jackish,2014,p.179.

[50] Ibid,p.183

[51] Jackish,2012,p.189.

[52] Hofmeister,2014,p.155.

[53] Ibid,p.140.

[54] 村瀬興雄『アドルフ・ヒトラー：「独裁者」出現の歴史的背景』（中央公論社、1977)、174-175頁。

[55] 同上

[56] Robert G.L. Waite,*Vanguard of Nazism : the free corps movement in postwar Germany 1918-1923* (Cambridge,1952)『ナチズムの前衛』山下貞雄訳（新生出版、2004)、175頁。

[57] Ibid.,p.146.

[58] G.L.ウェイト、前掲訳書、16頁。

[59] 同上

[60] 同上、17頁。

[61] 同上、24頁。

[62] Richard Bessel, *Nazism and War* (London, 2004)『ナチスの戦争1918-1949：民族と人種の戦い』大山昌訳（中央公論新社、2015)、23頁。

[63] 同上、24頁。
[64] 石田勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』（講談社、2015）、46頁。
[65] 村瀬興雄『ナチズム：ドイツ保守主義の一系譜』（中央公論社、1968）、114頁。
[66] 林健太郎『ワイマル共和国：ヒトラーを出現させたもの』（中央公論社、1963）、106-107頁。
[67] ベッセル、前掲訳書、28頁。
[68] ベッセル、前掲訳書、29頁。
[69] Jackish,2012,p.161.
[70] ダレーのイデオロギーについては中村、前掲書、第四章第三節を参照。
[71] 村瀬、1977、150頁。
[72] Jackish,2012,p.170.
[73] *MK*,S.333.
[74] 原田昌博『ナチズムと労働者:ワイマル共和国時代のナチス経営細胞組織』（勁草書房、2004）、30頁。
[75] 中村、前掲書、352頁以下及び原田、前掲書、45頁以下
[76] 中村はその著書の中でファルターの見解を支持しナチ党を国民政党と見なすテーゼを掲げている。原田は、ファルターの議論はあくまでナチ党の国民政党的性格をヴァイマル共和国期における他の大政党との比較の上で指摘するものであって、ここに国民政党テーゼの限界があると指摘している。また石田（2015）はナチ党躍進の鍵をナチ党の国民政党的性格に求めている。
[77] Kolb,Eberhald.Schumann,Dirk., *Die Weimarer Republik*(München,2013)S.123.
[78] ベッセル、前掲訳書、44頁。
[79] 村瀬、1977、180頁。
[80] Jakisch,2012,pp.4-5およびHofmeister,2014,p.134
[81] Fritz Fischer, *Griff nach der Weltmacht : die Kriegszielpolitik des kaiserlichen Deutschland 1914-1918* (Düsseldorf,1961)『世界強国への道:ドイツの挑戦1914-1918年』村瀬興雄監訳（岩波書店、1972）、188頁。
[82] 谷、前掲書、p.98
[83] カーショー、前掲訳書、107頁。
[84] 谷、2012、p.99.
[85] Stoakes,1986,p.52.
[86] カーショー、前掲訳書、176頁。
[87] Frymann,Daniel(=Claß,Heinrich),*Wenn ich der Kaiser wär' : politische Wahrheiten und Notwendigkeiten*(Leipzig,1912),S.43. 以下本書を*KB* (= Kaiserbuch) と略記する。
[88] Ebd..
[89] Ebd.,S.80.
[90] Ebd.,S.23.
[91] Ebd.,S.132-133.
[92] Ebd.,S.29.
[93] Ebd.,S.22.
[94] Ebd.,S.24.
[95] Ebd.,S.43.
[96] Ebd.,S.38.
[97] Ebd.,S.30.
[98] Ebd.,S.31.
[99] Ebd.,S.32.
[100] Ebd.,S.74.
[101] Ebd.,S.5-6.
[102] Ebd.,S.136.
[103] Ebd.,S.8.
[104] クラースは『皇帝本』の結論としてドイツの人口増大に対する現実的な解決策は過剰人口を海外へ再配置することであるとする。しかしこうした結論はあくまで全ドイツ連盟指導部が「戦争狂」であるという印象を持たれないための方便であったとStoakesは指摘している。(Geoffrey Stoakes, *Hitler and the quest for world dominion* (Leamington Spa,1986),pp.40-41.)
[105] Ebd.,S.140.
[106] Ebd.,S.142.
[107] Ebd..
[108] Ebd.,S.161.
[109] Ebd.,S.90.
[110] Ebd.,S.91.
[111] Ebd.,S.92.
[112] Ebd..
[113] Ebd.,S.96.

[114] Ebd.,S.124.
[115] Ebd.,S.46ff.
[116] Ebd.,S.52ff.
[117] Ebd.,S.118.
[118] ヴィンクラー、前掲訳書、Ⅰ324頁.
[119] *MK*,S.73.
[120] Ebd..
[121] アーリア人の「人種的価値」を主張する人種主義的世界観はすでに19世紀にゴビノーやチェンバレンによって表明されており、ヒトラーはそうした19世紀から連なる精神史的伝統を踏襲していた。
[122] *MK*,S.297.
[123] Ebd.,S.384.
[124] Ebd.,S.390.
[125] Ebd.,S.299.
[126] Ebd.,S.441.
[127] *MK*,S.232.
[128] ヒトラーは『わが闘争』第2巻13章において、戦前ドイツにおいては民族扶養策としては最悪の手段、すなわち植民地経営及び貿易政策が選びとられたとしている。
[129] *MK*,S.310-311.
[130] Ebd.,S.311.
[131] Ebd.,S.325.
[132] Ebd.,S.333.
[133] Ebd.,S.312.
[134] Ebd.,S.313.
[135] Ebd..
[136] *MK*,1939,S.54.
[137] 中村、前掲書、68頁。
[138] *MK*,S.332.
[139] *Hitlers Zweites Buch:Ein Dokument aus dem Jahr 1928*, hrsg. v. Gerhard L.Weinberg (Stuttgart,1961),S.53 以下本書を*ZB*と略記する。
[140] *MK*,S.145,650-651.
[141] *MK*,S.143.
[142] *Hitler : Reden, Schriften, Anordnungen : Februar 1925 bis Januar 1933*, hrsg. vom Institut für Zeitgeschichte (München et al.,1992),Bd Ⅱ,S.570f
[143] *MK*,S.34ff,244ff.
[144] Ebd.,S.252.
[145] *ZB*,S.61-62.
[146] *MK*,S.143-144.
[147] *ZB*,S.46.
[148] *MK*,S.243.
[149] *ZB*,S.69.
[150] Ebd.,S.62.
[151] Ebd.,S.47.
[152] Ebd.,S.221.
[153] クロル、前掲訳書、46頁。
[154] *MK*,S.651,658.
[155] *KB*,S.38.
[156] *MK*,S.301.
[157] Claß,*Zum deutschen Kriegsziel*,S.19.
[158] *KB*,S.182-183.
[159] Ebd.,S.16.
[160] *ZB*,S.218-219.
[161] *MK*,S.142.
[162] *MK*,S.232.
[163] カーショー、前掲訳書、上103頁。
[164] *MK*,S.312.
[165] Ebd.,S.310-311.
[166] Ebd.,S.54.
[167] 中村、前掲書、67頁。
[168] Hitler,*Reden, Schriften, Anordnungen*,Bd. Ⅰ S.211.
[169] クロル、前掲訳書、31頁。
[170] *Hitler's table talk, 1941-1944, with an introductory essay on The mind of Adolf Hitler*, ed. by H.R. Trevor-Roper(London,1953)『ヒトラーのテーブル・トーク』上巻、吉田八岑訳（三交社、1994）、203頁。
[171] *MK*,S.676.
[172] Hitler,*Reden, Schriften, Anordnungen*,Bd. Ⅱ S.121.
[173] Ebd.,S.259.
[174] *ZB*,S.82.
[175] *MK*,S.173.
[176] Ebd.,S.330.

[177] Ebd.,S.448.
[178] Ebd.,S.526.
[179] Ebd.,S.522ff.
[180] Ebd.,S.520.
[181] Hitler, *Reden, Schriften, Anordnungen*,Bd. I S.306.
[182] ヒトラーは早い時期から全ドイツ主義への共感を持っており、彼がシェーネラーの思想―反ユダヤ主義で繋ぎあわされた反自由主義、反社会主義、反ハプスブルクの急進ナショナリズム思想―に触れたのはナショナリズムの強いリンツでのことだった。（カーショー、前掲訳書、上61-62頁。）
[183] *MK*,S.106.
[184] Ebd.,S.108.
[185] Ebd.,S.114.
[186] カーショー、前掲訳書、上62頁。
[187] 同上,63頁.
[188] *MK*,S.113.
[189] Ebd.,S.114.
[190] Ebd.,S.329.
[191] Ebd.,S.332.
[192] ヴィンクラー、前掲訳書、Ⅱ5頁。
[193] ヒトラー、前掲訳書、186頁。
[194] Rainer Zitelmann, *Hitler : Selbstverständnis eines Revolutionärs*, 3. Aufl (Stuttgart,1990), S.51-55.
[195] Hitler, *Reden, Schriften, Anordnungen*,Bd. I S.111.
[196] クロル、前掲訳書、27-28頁。
[197] *Hitler:Reden und Proklamationen,1932-1945 : Kommentiert von einem deutschen Zeitgenossen*. hrsg und kommentiert von Max Domarus (München,1965) ,S.61.
[198]「革命家ヒトラー」の研究として上記のZitelmannが挙げられる。Zitelmannによればヒトラーは1918年のドイツ革命を「単なる政府の交代」であり「偽革命」にすぎないと見なし、これまでのドイツ史で革命が発生したことは一度もないと評していた。(Zitelmann,op.cit.,S.51-52.) Zitelmannによればヒトラーの「革命」とは「根本的かつ世界観的に基礎づけられた、社会的政治的状況の転換」であった。（Ebd.,S.489）本論も同様の理解に立ってヒトラーの「革命」を把握する。
[199] Hitler, *Reden und Proklamationen*,S.715, S.173, S.1481.
[200] Ebd.,S.1865.
[201] Ebd.,S.61.
[202] ヒトラー、前掲訳書、137頁。
[203] *ZB*,S.144.
[204] Hitler,*Reden und Proklamationen*,S.761.
[205] Ebd.,S.723.
[206] クロル、前掲訳書、29頁。
[207] 同上、68頁。
[208] Hitler, *Reden, Schriften, Anordnungen*,Bd. I S.255.
[209] Ebd.,S.255,S.356.
[210]「ヒトラーのマルクス主義・共産主義理解は感嘆と恐怖の典型的両価感情であったがこれはおそらくスターリンとソ連に対する彼の姿勢において特に例証される」。(Zitelmann,op.cit.,S.475)
[211] クロル、前掲訳書、33頁。
[212] クロルによれば勿論彼ら特にナショナル・ボルシェヴィズム的なユンガーやエルンスト・ニーキッシュからすればヒトラーの反ブルジョワ姿勢もまたその実践的政策も手ぬるいものであって、ナチ党を国民的ブルジョワ日和見主義者と見なしていた。
[213] クロル、前掲訳書、58頁以下。
[214] *MK*,S.391. またHitler, *Reden, Schriften, Anordnungen*,Bd.Ⅱ,S.673.
[215] カーショー、前掲訳書、上141頁。
[216] ベッセル、前掲訳書、45-46頁。
[217] 同上、115頁。

（うえおか　ゆりや　北海道大学大学院法学研究科修士課程修了、日本アイビーエム・ソリューション・サービス株式会社）